

運命交換

らんめいこうがんばん ぼけんしつてね

WA



ADULT ONLY

小説: Tarota

挿絵: 甘野氷

序 章。運命の幕が開く

第一章。奪われた女教師

第二章。ねらわれた転校生

第三章。弄ばれる少年少女達

終 章。そして運命の輪は回り続ける

あとがき

1	1	1	0	0	0
9	9	5	9	2	0
8	0	0	2	8	6

登場人物紹介

Characters



【男性陣】

- | | | | |
|------------|-----------|---|---------------------|
| まつむら
松村 | まさる
勝 | … | 五分刈り頭で無骨な感じの青少年。巨根。 |
| はつしば
初芝 | ひろき
弘樹 | … | 勝の悪友。 |
| ごじょう
五条 | ごうき
剛毅 | … | 中性的な雰囲気 of 青少年。 |
| たちき
立木 | はるお
春夫 | … | 太り気味でオタク的な青少年。 |

【女性陣】

- | | | | |
|------------|------------|---|-------------------|
| むらた
村田 | かおるこ
薫子 | … | 保健教諭。熟した色気で人気。 |
| まつゆき
松雪 | えみ
絵美 | … | 英語の教師。可愛らしい外見で人気。 |
| すずき
鈴木 | サブリナ | … | 金髪碧眼の転校生。スタイル抜群。 |
| すずき
鈴木 | サマンサ | … | サブリナの母親。 |
| たちばな
橘 | ななか
七華 | … | 幼さを残す学園の美少女。 |

序章。運命の幕が開く

傾いた日差しに照らされた学園に響く電子的な鐘の音は、授業が終了したことを示す合図だ。教師の号令と同時に、拘束時間から解き放たれた生徒達の口々からは安堵の息が一齐に上がる。放課後という名の甘美な響きを持つこの先の時間を、より有意義に過ごそうとするようにか、思い思いのグループ単位に、または独りで散っていく。

「ふあゝ。最後、現国とか超眼いよなあゝ」

五分刈り頭の男子生徒が、そんな風にボヤきながら体を伸ばすと豪快な欠伸を決める。

「お前にゃ最終が『数学』でも『世界史』でも何でも同じだろうっ！」

近寄ってきた別の男子生徒がツツコミの言葉を入れた。

「んなこたねえよ……『体育』か、雪ちゃん先生の『英語』だったら眼もバッチリ冴えるね！」

「雪ちゃんの授業は、単にエロボイスを堪能しているだけだろ？」

容赦の無いツツコミの言葉に、五分刈り頭を掻きながら「ばれたか……」と悪びれもせずに

呟き返す。

「んで、松っちゃん。今日は部活どうすんの？」

松っちゃんと呼ばれた五分刈り頭の少年……松村まつむら 勝は逡巡する間もなく逆に問い返した。

「今日って何曜日だっけ？」

「お前な……木曜日に決まってんだろうが」

「そか……じゃあマネージャー居ない日じゃん。もち、サボり決定えー！」

勝は伸ばしていた背筋のままに片手を上げて氣勢を上げる。

「んじゃ第二部活の方行っとく？」

悪友の問いかけに、またも勝は即答を返す。

「いいね！ っつか兼部の方に出るから休みつつー事で決定えー！」

もう一つ片手を上げる勢いのままに、今度は椅子から立ち上がり鞆を掴む。

「んじゃ行くか！」

勝とその友人が教室を後にして、向かうは『中央情報処理室』と大仰なプレートの掲げられた部屋だ。彼ら二人は万年補欠を友とする野球部と掛け持ちで、その部屋を根城として活動する『コンピューター部』に在籍しているのだ。本来はプログラミング作成などを目的としている部活動なのだが、そのような技能を磨いている生徒は一部だけで、暇な生徒達が無料ネットカフェとして利用しているが実態だ。

部屋に入って挨拶もそぞろに、二人も早速空いている席を探してはブラウザを起動してはお気に入りの巡回サイトを巡っていく。

「んあー。またアクセス拒否られたあー」

「モロ見えサイトとかは流石に無理っしょ……素人画像投稿サイトとかも、やっぱ無理だなあ

……」

セキュリティとモラルの都合上、怪しげだったりエロいサイトには接続できないのだが、何とかして見たいのは男子が持つ本能的欲求だから仕方が無いであろう。けれども本当に見たいのならば、他にも方法はあるのだから、ここは『学園で見たい』という背徳的な挑戦行為がそうさせているのであろう。

「おお。松村氏、初芝氏、久しぶりでござるなあ」

背後からの声に振り返るまでもなく、奇妙な言葉遣いで二人は誰がやってきたのかすぐに察する事が出来た。

「よおつタルキちゃん。セキュリティ緩めてくんない？」

「いやいやいや。いくら拙者でも無理でござるよ」

タルキと呼ばれた男子生徒は奇妙な言葉遣いのままに、円を基調としてデザインされたのではないかと思えるような顔を緩めながらに言葉を続ける。

「それよりも、また面白くて妖しげな情報を入手したでゴザルよ」

「マジで？ 近郊都市伝説シリーズ？」

「都市伝説というよりも呪術系サイトでござるなあ」

タルキは大きな腹を揺り動かしながら、太い手を割り込ませて勝のキーボードを打鍵している。そうしてブラウザに表示されたのは、黒を基調とした背景の怪しげな雰囲気の良いサイトであっ

た。

「ここは『魂の導き手』ガイスト・リヒターを名乗る管理人が、自ら作り出した呪術を記したサイトですぞ」

「なにそれ？超電波系じゃね？」

タルキを挟んで両隣の松村と初芝は笑い声を上げる。

「んで。この電波系呪文サイトがどうしたって？」

笑いながら問いかける五分刈りの松村こと勝の言葉に、タルキはマウスを手繰ってサイト上から目当てのページを表示させる。

「なんか『魂の導き手』氏が言うには、特別な呪術を施した場所が幾つかあって、その中の一つが近所っほいんですあゝ」

ボテっとした指先でマウス上のホイールをぐりぐりつと動かし、ページをスクロールさせていくと地図が現れた。拡大してあるからかパッと見では判断がつかない。タルキは地図部分を更に弄って広域表示へと切り替えていく。

「お？確かに近場のようだな……」

「ここ知ってるぜ！帰り道にチャリで通るわ！確か廃墟になってた筈……」

初芝はつしば 弘樹ひろきにとつては既知の場所のようだ。

「んで。ここに何があるって？」

「『魂の通り道』ソウル・トレインを設置したとか何とかって事らしいじやないや」

「なんだそりゃ？」

弘樹も勝も再び失笑の渦を巻き起こす。

「なんか放置されていた三面鏡に呪術をかけたので、覗き込んだ者にとって魂が惹き会おう相手が映し出されるであろう。興味があるならば是非お試しあれ……とか何とかでござるなあ……」

再びスクロールが止まって表示されたブラウザの画面には、件の物と思しき古ぼけた三面鏡の写真と読み上げた解説文が記されていた。

「なんじゃそりゃ？」

「つまりは良くある『運命の相手』が映るとかいうやつじゃねえの？」

初芝の推測に松村は五分刈り頭を掻き雀り「一気に学園の七不思議レベルまで下がったなあ」と落胆の色を見せた。

「でも廢墟の鏡を覗きに行くとか、ちよつとした怪談っぽくて面白そうじゃね？」

初芝の言葉に評価を変えたのか、勝も「だな！」と短く肯定の言葉を添えた。

「肝試しだとしたら……女子の参加者も欲しいかも……」

俄然やる気となった勝は勢い良く立ち上がると、室内に響く声で呼びかけを始めるのだ。た。

夕闇に煙る住宅街の一角を学生達が歩いていく。目的地へと向かう為には、僅かばかりとはいえ木々の間を通り抜けねばならず、薄暗い闇の中に黒い服が溶け込みそうな位だ。周りに仲間の気配を感じるものの、はっきりとは確認できずに本当は一人で得体の知れない者達と歩いているような不安に襲われそうになる。行き先が廃墟なればこそ、男達にとつても心細く感じてしまうのだ。

「つたく……こんだけ雰囲気が高潮なのに、メンバー的にはアレだよなあ」

陰闇に沈みそうな気分を吹き払うかのように勝が軽口を叩く。一団を形成しているメンパーは勝の他は、案内人の初芝弘樹を先頭にして、情報提供者であるタルキこと立木春夫と、呼びかけに応じて参加した五条剛毅という男子生徒だ。結局のところ女子の参加者など居なかつた訳で、男四人で肝試しというのは絵面的にどうかと思うのも無理はない。

「まっ仕方ないだろう。噂の内容的には女子向けだとしても、向かう先が廃墟だし俺らに囲まれたくも無いって訳だろ？」

前方からいつもの調子の声が飛んできて安堵するものの、（何を怯えてんだよ！）と勝は自分を叱咤しながら更に軽口を返す。

「いや俺が女子だったら、格好良い男達に囲まれての怪談タイムにキャーキャー悲鳴をあげて、ヒロインぶりを発揮したりするね！」

「そうかい。そうかい。ほらよ着いたぜ！」

木々が開けると夕闇に照らされた一軒家が現れた。手入れされていない垣根の向こうに、陰鬱な妖気が漂うような古ぼけた日本家屋が見える。人が住んでいなく、替わりに別のモノが棲んでいそうな独特な気配に一同の背筋が凍りつく。

「へへ……なかなか霧囲気あるじゃねえか……」

勝の口先は相変わらずの言葉を紡ぐが、声の調子は少々震え気味で完全に吹き飛ばせてはいない。入り口を前にして案内人の脚も止まっていたが、誰一人として先に踏み出そうとはしない。いざ着いてみたものの霧囲気に気圧されているのだ。

「ほら……初芝……案内の続き頼むぜ……」

「いや。俺はここまでだから。松っちゃん、お先にどうぞ！」

「んじや情報提供したタルキが行く所か？」

「いやいや……拙者には荷が重いでござるなあ……」

「それじゃ……名前からして剛毅が男を見せるところだろ？」

「ええー！？ ぼ……僕が完全に名前負けしてるって、松村君も知っているよねえ……」

五条剛毅は可愛らしい顔を歪めて竦んでいる。これで女の子だったら完璧なのになあ……と勝は心の中で呟いた。いや反応が見たくて狙ってやったのであるかもしれない。

「なんだよ……誰も男らしいと見せるヤツはいねえーのかよ！」

「だから松っちゃん行けって！」

「おう！行ってやるうじゃねえか！」

売り言葉に買い言葉なのか、引き上げるといふ選択肢を選ばずに、勝は錆付いた門に手を掛ける。途端に『キイー』と物悲しい音が響き渡り、虚勢を張っていた心を揺らす。荒れ放題の庭を抜けて、いよいよ玄関の扉と対面する。

「開いてなかったら仕方ないよなあ……」

希望は虚しく潰えて、カラカラと音を立てて戸が横開きに動く。

「ご……ごめんくださいあーい……」

見るだに人が居ないと解っていても、念の為にと断りを入れる。もしこれで返事があるうものならば、一目散に逃走してしまうのは目に見えているし、撤収する理由としては充分だ。けれども声は、暗く静寂な闇へと吸い込まれていくだけであった。

「つてか……やっぱ、暗くて見えないから、仕方が無いけど今日のところは引き上げようぜ？」
怖い訳じゃないんだからな！ という響きを存分に含んだ勝の提案は、しかし、背後からの思わぬ反応によって頓挫する。強い指向性の光が差し込んできたのだ。

「あ……懐中電灯持っているの忘れてました……」

「五条氏！ ナイスですなう！」

「あ……あるなら先に出せよな……」

口実を潰されて渋々と勝はライトを受け取る。廃屋に吸い込まれる光は、正しく一筋の光明

にも見える。今ならば漆黒のミラー峠すらも一人で踏破できそうだ。

「しょうがねえな……んじゃ行くか！」

覚悟を決めて勝は一步を踏み出そうとして、今度は別の理由から躊躇ってしまう。

「こういう場合も玄関で靴を脱いだ方がいいのかな？」

「埃塗れになりたきゃそうしろよ！」

日本人特有の生活習慣に対し、初芝弘樹が冷たくツッコミの声を入れた。板張りの廊下に靴を踏み入れるとギョッと不気味な音が響き渡る。

「どこ行けばいいのかねえ？」

「あんまり広くないから片っ端から扉開けて見て行けばいいんじゃないかね？」

最初の襖を開けるとポロポロになったテーブルなどが散乱し、埃にまみれてネズミやら虫の死骸も混じっていて、一気にテンションが下がってしまう。懐中電灯を左右に振って室内を確認し、無言のままに扉を閉じる。

「次行く？」

探索を始めた事に後悔しつつも、誰も「もう帰ろう」などと言い出さないから続行が可決した。しかし次の扉を開けた所で、冒険は終わりを告げた。ライトの明かりを一部が欠けた三面鏡が反射したのだ。

「マジで有ったけど……」

恐る恐ると室内へと入り、『魂の導き手』が仕掛けを施したという魔法の物品を取り囲む。けれども古ぼけて壊れかけたアンティーク品だというだけで特別な物には見えないし、特別な何かが映し出されるなんていう事も無かった。

「ベ……別に普通の鏡じゃんか……なあ……」

勝の言葉には『確認もしたし、もう帰ろうぜ』という響きが含まれている。内心ビクビクしていた一同も、それを汲み取って安堵の溜息を漏らす。

「ま……こんなもんだろ。折角だし何か『肝試し』の成果でも……って鏡台のどこになんか一杯紙片があるぜ」

弘樹が中の一枚を摘んでみると、小さな紙には星型のような図形と神秘的な文字が描かれていた。

「なんだこれ……これが魔術を掛けた証って事か？」

「んー魔方阵のようにも見えるでゴザルなあ……」

記念になるならと各人一枚づつ紙片を取っていく。

「そうだ。折角だし記念写真も撮ろうぜ！」

勝はポケットから携帯電話を取り出した。懐中電灯をフラッシュ代わりにカメラ機能で鏡台を撮影する。無造作にボタンを押した瞬間、勝の中で何かが弾けるような感覚が襲った。ビクッと反射的に体が揺れると、周りの面々も同じような反応をみせていた。

「何か変な感覚がしたな……」

弘樹が呟くと、俺も僕も拙者もと全員が追隨する。

「んおっ!？」

いきなり勝が素っ頓狂な声を上げた。

「どうしたん？」

「なんか……写真……」

勝が示す携帯の液晶画面には、不鮮明ながらに三面鏡が映っていたのだが、その鏡面部分が変な風になっていた。差し込む懐中電灯の光が乱反射して良く見えないのだが、映りこんでいる人物はこの場にはいない明らかに女性に女性の姿である。

「霊現象つすか!」

「これは例の魔術なのかもしれないでござるよ?」

半信半疑なのかタルキの言葉も語尾が不鮮明だ。けれども、一同には思い起こしたように手元の紙片を再度見つめた。この呪文が発動して鏡に反映された結果とも見てとれなくもない。

「とりあえず試しに鏡に姿を映して撮ってみようか……」

おっかなびっくりといった感じで、勝は一人で試してみる事にした。

「んおっ!？　なんだこれえ?」

紙片を持って鏡に写った自分を撮った筈なのに、そこに写っていたのは五分刈りで学生服姿

の松村勝の野暮ったい姿などではなかった。豊かな金の髪を柵引かせた白い肌の美少女がいたのだ。

「ちょー可愛いけど……これやっぱ心霊現象か何かで、以前の持ち主の怨念とかなんじゃねえの……」

そう考えると美少女の画像も薄気味悪く思えて、勝は背筋を凍らせた。

「んじゃ俺も試してみんぜ！」

弘樹も紙片を持った姿を自分の携帯で撮影する。

「つと……お？これ……保健の村田じゃん」

やはり携帯に映っていたのは初芝弘樹の姿などではなく、白衣姿の大人の女性だった。眼鏡の奥から少々キツイ感じの視線で見返す女性は、彼らの学園で保健医として職務をしている村田むらた 薫子かおるこであった。

「ほら！ これで呪いじゃないって証明されたな！ って事は俺の運命の相手は村田ちゃんかあ……スタイル抜群で色気ムンムンなのはいいけど、お堅いし何より結構な年の差だしなあ……ちょい微妙かなあ……」

「え？ んじゃ、俺の運命の相手は外人って事お？」

勝は再び写真を眺める。青い瞳に可愛らしい表情も魅力だし、薄着を押し上げる胸もすいつきたくなるような存在だ。見ているだけで一目惚れしそうなのに、運命の相手だと思おうと余計

にドキドキと胸が高鳴ってくる。

「やべえ！ 早く知り合ってセックスしてえ！ でも、この娘って誰さん？」

「知らないってえーの！ これから出会うんじゃないかねの？」

何となく差をつけられたような気がして弘樹は面白くもなさそうに答える。

「あつ……じゃあ僕もやってみよ……」

続いて挑戦したのは五条剛毅であった。やはり画面には自分の姿の変わりに、優しそうな笑みを浮かべた大人の女性の姿が映っている。

「松雪先生だ……」

「なぬう？ 雪ちゃん先生え！？」

彼らの学園で英語の教鞭を取っている松雪まつゆき 絵美えみである。幼さすらも感じられる可愛らしさと発音する時の舌足らずで淫靡な響きで男子生徒からの人気は高い。

「いいじゃん。松雪ちゃん。同じ教師カテゴリーだったら、俺の村田ちゃんよりも当たりじゃん！」

「う……うん……確かに松雪先生は好きな先生だけど……」

「だけど何だよ！ まさか好きな娘がいたのに残念って訳かよ！？ 誰だ言えよ！」

さつきまで怪談話に怯えていたのはどこ吹く風と、ギャーギャーと巻き起こる騒ぎを尻目にして、最後に残った立木春夫も撮影をする。

「拙者のお相手は誰でゴザルかな？」

やはりタルキの太った姿の変わりに、制服姿の女子生徒が映っていた。

「誰でござるかな？ 三次はよく解らんでつす」

「あー。これ一年の娘じゃなかったっけ？」

「ナナカちゃんじゃねえーか！ 一年でも指折りの美少女！ 校内でミスコンやったら上位に入るの間違いなしの！」

弘樹が興奮気味に捲くし立てる。あどけなさも残る位の顔は確かに笑窪も可愛らしいく、ツインに結った髪型も小さな背丈と似合っている。

「妹系キャラでゴザルなあ。そう考えると萌えますなあ〜」

頬についた脂肪を歪ませてタルキは満面の笑みだ。

「ちくしよー。密かに狙ってたのに、こんなタルミたいなタルキの嫁になるかもしれないなんて！ あーあ……俺だけハズレくじ引いた気分だぜ……」

携帯画面に映った村田教諭をがっかりと見つめる弘樹に、トドメを刺すようにタルキの言葉が覆いかぶさった。

「嫁？ 俺の嫁えーキター！ つすなあ〜」

それから『運命の相手って嫁になるって事でいいの？』『その過程はどんな風だろうか』と盛り上がる三人を尻目にして、弘樹はムツと押し黙ったままであった。視界の隅で鏡が妖しく

輝いてみえたが、心情を反映したものだど解釈した。まさかこれが『魂ソウルの通り道トレイイン』が開いた瞬間であろうとはこの時には思いも抛らず、いや解っていたとしてもどうする事も出来なかつたであろう。運命は回り始めているのだから……

肝試しで不思議な体験をした翌日、大きなあくびを噛み殺しながら勝は教室に入ってきた。

「眠そうだな……」

早速に近づいてきた弘樹が声を掛ける。

「ああ……昨日は妄想が止まらなくて、発電しすぎちゃってさあ……」

これ見よがしに携帯を開いて画像を見せつける。

「そうかい。ゆうべはお楽しみでしたかい」

画面を見向きもせずに弘樹は答える。相変わらずに不機嫌な様子だ。

「なんだよ。お前だって、かおるん先生をズリねたに比べればいいだろ？」

「煩いな……。確かに保健室でイケナイ診察とか俺も好きだし、前は使ったけど……あらためて恋人とかって観点で見ると……やっぱキツイよ。大体、そういう方向に進展するなんて想像もできねえし、どんなイベント展開があんだよ」

「それはこれから解るんじゃないの？」

勝の言葉を裏打ちするかのよう、その日の体育の時間に弘樹は派手に転げた。大爆笑で迎

えるクラスメイトに舌打ちをし、擦り傷の具合に顔を顰める。

「保健室行って手当てして貰えよ。運命のお相手にさ！」

からかう勝の声に「うるせえよ！」と返しながらも、ざっと水で洗って染みる痛みに再び顔が歪む。

（べ……別に……消毒して貰うだけだし……特別な想いなんか無いし……）

心の中で言い訳を並べながら、体育教師の許可で保健室へと向かう。その道中は心臓がバクバクと唸っていて、体の傷よりも不整脈で倒れるかと思う程であった。

「しちゅれーしまっふ」

似つかわしくないまでに狼狽して声が裏返る。扉を開ければ振り返った村田薫子と眼があつて、再び鼓動が跳ね上がる。

「ん？ どうしたの。随分と顔色が悪いようだけ……」

声も出せずに暫く無言で向き合い、不信に思った薫子が診察用の椅子に座るように命じる。フワフワした足取りのままに、弘樹は言われるがままに腰を降ろした。それからすぐに、足の擦り傷に気がついて消毒が行われる。手際は別に良くも悪くも無いのだが、呆然と目の前の女性の色香を嗅ぎ、動く姿ばかりに見惚れていた弘樹には、一瞬で治療されたように思えた。

「うん。傷の治療は終わったけれど……ポーツとして顔色も悪いし、別の病気でもあるんじゃない？」

細い掌が伸びてきて弘樹の額に冷たい感触が広がる。

「あ……いや……大丈夫つすから……」

「やつぱり熱があるみたいね。病気の初期兆候は正しく観測しないと駄目よ」

引っ詰められた掌には返す刀で体温計が握られていた。

「ほらっ。測って」

眼鏡の向こうで切れ長の瞳が有無を言わせぬ光を宿していて、弘樹は黙って受け取ると腋の下へと入れた。

「んで？ 何でベッドで休まずに戻ってきてるんすか？」

弘樹が戻って開口一番に勝が詰問する。

「しょうがねえだろ……別に熱も無かったし」

本当は微熱気味の体温で、気分が悪いなら休んで行けと言われたのだが断って戻ってきたのだ。

「でも名前と顔を売るのには成功したんじゃないかね？」

「日に何人も生徒が来ているだろし、こんなのが出会いの一步な訳ねえーだろ！」

茶化す勝に対して弘樹もやり返す。しかし改めて見直した時に、何だかイイかもと弘樹が思い返したのは確かだった。

「けど、お前はいいよなあ。校内に運命のお相手がいる。こっちは、どこの誰とも解らないんだもんなあ……発電は捗るけど日常生活に潤いがねえよなあ……」

「妙に意識しながら生活すんのも結構苦しいもんだぜ。それに、お前の相手だつてじきに会えるって！」

「何年後の話だよ……」

弘樹や剛毅が教師との一方的な事情からドギマギと心を揺らせ、春夫が不気味な視線と笑みで下級生に気味悪がられ、勝は携帯画面に映る君へ思いを募らせる。そんな数日間の日常が過ぎた後で、出会いが唐突に訪れた。

ある朝、日課の溜息と共に勝が登校すると、教室にいる野郎共が随分と騒がしい事に気がついた。

「どうしたんよ？」

クラスメイトに問いかけてみれば、「転校生がやってくる」という。しかも目撃情報によれば相当な美少女だという噂だ。

(いくら転校生が来るからって、この娘に勝てる魅力は無えよなあ……)

待ち受け画面に設定された『愛しの君』へと、勝は熱い視線を送る。けれども、すぐに前言は撤回しなければならなかった。

「ほら！席につけー」

担任に連れられてやってきた転校生というのが、豊かな金髪と制服ごしに明らか大きなサイズの胸を揺らせた美少女で、まさに勝が思い描いていた相手であったのだ。ここ数日間、片時も忘れなかった相手だから見間違えう筈も無い。

「えー。今日からこのクラスに新しい仲間が加わる事になった。見ての通りに海外からの留学に思えるかもしれないが、国内からの転校生だから間違えないように。では自己紹介を……」

「はじめまして。私の名前は鈴木 サブリナと言います。日本人とロシア人とアメリカ人のクォーターハーフです。生まれてからほとんどの時間を日本で過ごしてますから、中身は皆さんと変わらないですし言葉も英語の方が苦手な位です。どうか気軽に話しかけて下さいね」

澄んだ綺麗な声が止むのと同時に、拍手の渦が巻き起こる。熱心に手を叩き野次を飛ばしているのは勿論男子生徒達だが、抜群のプロポーシヨンと派手な見た目に、女子からも熱視線が注がれる。

勝はといえば拍手も声援もせずに、ただただ呆然と壇上の彼女を見つめていた。息をするのを忘れる位で、そうでなくても高鳴る胸による血圧上昇があり、気を失わんばかりだ。ざわめく室内を教師が制圧するもの、朝礼が終わった瞬間には黒山の人だかりが転校生を取り囲む。

「よう。あれって……」

弘樹の言葉に勝は無言で携帯を差し出す。

「やっばそうだよな……現れたじゃん。お前の運命の相手。アプローチしに行けよ！」

勝は茫然自失としたまま無言で首を振り、「いや……まだ心の整理がついてねえ……」と短く答えるに留めた。

結局、その日はボーっとしたままで、勝が運命の相手とされる転校生の美女に近づく事はなかった。いや、転校してきた当日だけでは無く数日経っても同じようなままである。

「はあー」

重い溜息が中央情報処理室の一角に沈殿する。吐き出しているのは勝を含む四人の男達だ。

「進展のあった者は今日も無し……か……」

弘樹が空気を汲み取って言葉に変換する。

「だって……別に特別な何かがある訳じゃないし……普段通りに授業で会うだけだし……廊下ですれ違っても声なんかかけられないし……」

剛毅が弱々しく言葉を濁す。「確かに……」と同じく教師が攻略対象の弘樹も頷く。

「拙者なんか、そもそも下級生との接点が無いでござるよお〜」

小太りな体を縮めて春夫も項垂れている。

「松っちゃんは今クラスメイトになったのに、何で声掛けたりしないの？」

「見りゃ解んだろ！ 無理だって！」

無然とした表情で勝が返答する。何せ大半が西洋産である転校生の容姿は当然のように多くの耳目を集めていて、人気は過熱する一方で取り囲む人々が途切れる事は無い。よしんば輪に

入ったとしても、地味で無骨な外見の自分が相手の気を惹けるとも思えないから、背景の一部に溶け込んでしまうのが目に見えていて実行する気すら起きないのだ。それは、この場にいる全員に言える事だろう。

「もう、いつその事、相手に全部打ち明けてみるってのはどうだ？」

「えー！？ 何て言えばいいの？」

「運命の導き手によって選ばれた相手です！ って証拠写真を見せるでゴザルか？ 流石の拙者も『それは引くわ』状態ですってにいー」

再び吐き出された重い息が重なる。

「なんかねえのかよ……特別な仲が進展する方法。『運命の導き手』さんは何か書いてねえのか？」

勝の呟きに反応して、春夫の指が端末の上で踊る。

「んー。何かはあったでゴザルなあー」

モニタ上に表示されたページに、一同が視線が集中する。

「なになに……『魂の通り道が確立せし相手と特別親縁な仲になる方法』って長えよ……」

口に出したものの弘樹は、奇怪な用語と独特な文体の所為で早々に挫折した。勝も赤と黒で構成されたページに、途中で眼が痛くなつてリタイアした。それで二人のコンピュータ専門部員の解析に期待した。

「ええ〜!? こんなの無理だよお〜」

剛毅の情けない声が沈黙を破る。

「どうしろって?」

「半分に切った紙片のそれぞれに、自分と相手の名前を本人の直筆で書く。相手に自分の名前の紙片を渡して、自分は相手の名前を持つ。その後、鏡に向かって念を籠めれば、通り道によって二人の魂は惹き合い、特別な関係となれる……だって……」

要約された剛毅の言葉に、二人は面を喰らった。

「これ……実行できている時点ですでに特別な仲間じゃねえか?」

「だよなあ……こんなオカルトじみた真似を持ちかけるなんて難易度高えーよ……」

そしてまた重たい息が重なる。

「最後の鏡に念じる儀式は一人でも良いみたいですよ!」

春夫の言葉も全然フォローになっていない。直筆の名前を任意の紙に書かせる時点で、仲良くなっていないと無理な訳で、そもそも進展方法を探していたのだ。

「まったく……結局は成り行きを待つしかねえのかあ〜」

沈鬱のままに締めくくられた会合であったが、意外に早く運命の輪は廻り、驚くべき進展が待ち受けているのであった。

第一章。奪われた女教師

休日明けの月曜日、松村勝が登校すると、転校生の周りにはすでに人だかりが出来上がっていた。『運命の相手はこっちですよ』と日課になつてゐる念波を送りながら着席する。早い時間に登校して一人のチャンスを狙おうと思つた事もあつたが、通学途上から常に誰かしらが付いて取り付く島も無い。何度か試みて諦めた訳で、今は逆に目の毒だからと遅く来る事になっている。

そして不機嫌な自分をからかひに、初芝が軽口を叩きに現れるのが日課となつてゐるのだが、どうした訳か今日は襲撃が無い。

(俺より遅いとか珍しいよな)

何気なく教室を見渡して、席にじつとただずんでゐる初芝弘樹の姿を発見した。俯いた顔は暗く沈んでいて、一目で何かあつたと解る表情だ。勝は仕返しと事情聴取を兼ねて声を掛けに行く事にした。

「よお！ 何かあつたの？」

オドオドした不審な視線と、「あ……えと……」という短い言葉が返つてくるだけで、すぐに俯いて体を強張らせてしまう。

「元氣ないな……保健室の『運命の君』にでも診て貰つた方がいいんじゃないの？」

勝の挑発に、弘樹は身体をビクリとさせるものの、「いや……大丈夫……だから」と視線も合わせずにボソボソと答える。どこか余所余所しい態度は謎だが、明らかに全身から『例の件』で何かあった事を漂わせている。

(ソツとしておいてやるか……)

そう結論づけた勝は「ま！ お大事にな……」と言葉を残して自席に戻る。弘樹の病はすぐ回復する事など無く、授業中はぎこちない様子ままであった。

(こりや重症だなあ……)

何度か話しかけてはみたものの、どこか上の空な気の無い返事ばかりで、昼食を一緒に済ませると勝は眠気覚ましと称して席を外した。そうしてブラブラと校内を散策している途上で、思わぬ呼び出しがスピーカーから流れてきた。

(うえ〜？ かおるん先生が一体何の用だあ!?)

それは保健室の主である村田薫子からのもので、呼び出すのが弘樹ならばまだしもと、勝は納得いかない顔で歩を早める。もしかしたら例の計画について察知されて、その事情聴取なのかもしれない。そう考えれば弘樹の変な態度も納得がいく。

けれどもしかし、現実には想像よりも奇怪な事態を迎えていた。

「失礼しますう」

おっかなビックリとしながら、五分刈り頭を掻き筆りつつ入室してみれば、当の主は椅子に

座つて背中を向けたままで返事すらしない。

「あのゝ。村田先生え……松村ですけれども……」

「あはあくん。いらつしやうい」

艶っぽい声と共に振り返つた薫子の姿を見て、勝は目をひん剥いて驚いた。椅子の上に片足立ちになった女教諭は、スカートの中がバッチリ見えているのにも構わずに、乱れた白衣から豊満な乳房を覗かせて、服の上から採みしだいているのだ。眼鏡の奥の切れ長の瞳は蕩け、紅い艶やかな唇から甘い吐息を排出している。全身で乱れた女を演出していて、見所だらけで逆に気後れして勝は直視を避けた。それでも、タイトスカートから伸びる脚線美と、その付け根であるところの股間を覆う布に視線が釘付けになる。

「うふふふ……先生の事……もつと良く見ていいのよ……」

妖艶な誘い言葉と共に、マニキュアの塗られた細い指先が伸びてきて、勝の視線の先である黒いパンティーの上に躍り出た。そして股間の丘を淫靡に見せ付けるように這い回って、更には溝の部分を内側からの濡れさせて浮かび上がらせた。思わぬ痴態に勝は白昼夢を見せられている感覚だったが、股間からの激しい反応が現実だと伝えてきて、前屈みで必死に隠そうとする。

「あら……若い男の子が我慢なんて良くないわよおゝ。折角だから先生をオカズにして、そこで自家発電してすつきりしていつてね！」



言葉をついでいる間も薫子は両手を忙しなく動かし自分の肉体を貪っているので、甘い吐息も多量に含まれているから聴いているだけでも男性的欲求は噴火しそうになる。訳が解らず混乱する勝に対して、最後の一押しだと言わんばかりに、薫子は空いている方の脚を伸ばしては、上履きで勝の股間を軽く小突いた。

「あつ……ひゃううう。いや……そのお」

狼狽して奇声を発する勝に対し、薫子は突然の爆笑を返した。

「くははは……松っちゃん。もしかして射精しちゃった？」

豹変した態度にますます混乱が拍車する。

（からかわれていただけなのかよ……でも今、先生は『松っちゃん』て呼んだ！？）

戸惑う様子に薫子は思いがけない告白で返す。

「ごめん。ごめん。保健室淫乱女教師の誘惑と思っただろ？ 残念！ 俺でした！」

「はあ？」

「初芝弘樹だよ。お前の腐れた親友だよ！」

言葉の意味は伝わったが、内容が理解の外にある。

「どういうことですか？」

「俺が誰に見える？」

艶やかな声で『俺』という単語が飛び出すのは、倒錯感があってドギマギさせられる。けれ

ども誰に見えるかと言われれば勿論、「村田先生ですよね」と答えずにはおけない。

「そう。体は見ての通り薫子先生。だけでも中身は弘樹君なんだな！ 解るだろ？ 今までとは全然別人だって！」

確かにそれまでの『堅い印象の保健医』からは想像も出来ない乱れっぷりで、こうして話している最中も自らの身体を触っていて、まるで痴女のようなのだ。

「まさか……本当に弘樹なのか？ でも一体どうして……」

「それがさ、例の方法を試してみたんだよ。運命の相手と仲が進展するっていう方法！ そしたら、こうなっていた！」

見せ付けるように乳房を弄りつつ、弘樹を自称する薫子は艶色ボイスで経緯を語りだした。



それは土曜日の放課後の出来事であった。

野球部で適度な汗を流すというミッションを終えた弘樹は、練習中に捻ったかもとという曖昧な口実を持って単身で保健室へと乗り込んでいったのだ。時間的には、そろそろ保健室も閉まる頃合だから二人つきりになれるチャンスも多いだろう。そうしたら計画を実行に移すのだ！ と強い決意を秘めて歩んでいく。

「失礼します！」

意を決して保健室へと踏み入れれば、椅子に腰掛けた村田教諭が振り返る。周囲を見渡しても彼女一人しかない。弘樹は心の中でガッツポーズした。

「どうしたの？」

書き物から手を放し眼鏡の弦をカチャリと動かして、薫子は淡々とした言葉で尋ねる。

「えと……野球の練習中に、ちよつとヒネっちゃったみたいなんすよ……」

右手首を押さえながら弘樹は訴えた。薫子は弘樹を向かいの椅子に座らせると、患部を触診する。細く滑らかな指先が触れて、弘樹はドギマギとした。

「どう？ 痛い？」

握った手首をゆつくりと回しながらの薫子の問いに、握手している嬉しさの方が強くて弘樹は一瞬反応が遅れる。

「あ……ちよつと……ズキッと痛いすね」

痛いのは主に心の奥だけど嘘ではないです。弘樹は心の中で自己弁護した。

「軽い捻挫かもしれないわね。湿布を貼っておくね」

手首にヒンヤリとする感覚が広がる中、弘樹は続いでステップを踏み出す為に唾を呑み込み声を整える。

「ありがとうございます。あの……先生……少々時間宜しいでしょうか？」

「相談事？別に構わないわよ」

保健室には様々な相談事が持ち込まれるから、薫子にとっては別段珍しい事でもない。

「いえ……その……クラスの班活動の新聞作りで、先生方のアンケートを取る事になりまして……」

勿論嘘だ。罪悪感からも喉がカラカラになっていく。お願いに対して了承を取り付けたので、弘樹は鞆から一枚の紙片を取り出した。昼休みに中央情報処理室で作成したでっち上げのアンケートで、A4の紙を半分に切った物だ。もう半分の方には自分の名前を記入し、アンケートの答えも埋まっている。

「すぐに必要じゃ無いなら、持ち帰って書いておくけど？」

「あつ……いえ……簡単なアンケートですから、良かったらササッと書いて頂けませんか？」
後で回収しても良いのだが、何となくすぐに『呪い』の結果が知りたくて急かせてしまった。
「じゃあ、ちょっと待っていてね」

ペンが走る音が静かな室内に木霊する。白衣に包まれた薫子の背中を、特別な関係なった後の妄想を重ねて、弘樹はドキドキと眺めていた。

「これでいいのかな？」

差し出された紙片には、流麗な文字で記載されている。騙した事にチクリと心が痛んだ。

「あ……ありがとうございます！」

そして、すいません。と心の中で謝罪した。そしてクリアファイルに挟んで鞆に仕舞いこみ、同時に別の紙片をヒラリと床に落とす。

「それでは。遅くまで、ありがとうございました！」

慌しく出て行こうとする弘樹に、落し物に気が付いた薫子が「ちよつと！」と声を掛けてくるが、気付かぬ振りをして退出し小走りをする。紙片を拾った薫子が廊下を覗いた時には、弘樹の姿は見えなかった。

「しょうがないわね……月曜日にでも渡しましょう」

落し物はさつきと同じアンケートで、こっちは弘樹の名前が記載されていた物だ。薫子は手にした用紙を机へと持ち運ぶ。こうした親切心が驚くべき結果を招くなど、普通は考えもしないであろう。

逃げ出した弘樹はといえば、保健室から程近い男子便所に到着していた。手洗いの正面に設えた鏡に向かい、薫子によって書かれた先程のアンケート用紙を手にはしている。

(これで……後は……どうすんだっけ？ 念じるのか！ って何をだよ！)

用紙をぎゅつと握り締めて、とにかく頭の中に村田薫子の姿を思い浮かべて念唱する。

(先生……先生……村田先生。かおるん先生。薫子さん！)

先程みた姿形を脳内スクリーンに投影しながら、『特別な関係』になれる事を夢想していると不思議な現象が発現した。鏡に映る弘樹の姿がボヤけてきて、替わりに不鮮明ながらも薫子

の姿が浮かんできたのだ。段々と鮮明になってくると、彼女を斜めに見下ろしたような映像だと判明してくる。

(保健室の中……まさか鏡からの映像!?)

先程までいた室内の様子と、鏡というキーワードから弘樹は結論を導いた。

(ひよっとして、これが『通り道』ってやつか? だけど……これだけじゃ……)

相手の姿を一方的に見られても、盗撮行為と変わらぬ想いが伝わる筈も無い。そこで突如『本当に先生と特別な関係になりたいのか?』と言う問いが心に浮かび上がる。

確かに最初は年上すぎる相手に尻込みしていたが、意識して眺めて触れ合ってみると、優しさやら顔立ちの綺麗さやら成熟した色気やらの虜になっていた。だから『特別な関係になりたい!』と強く願っていた。

その瞬間、弘樹の内部が熱く揺れるのを感じた。心臓ではない魂のような中心からくる鼓動は、段々と強くなり引つ張られるような感覚が襲う。同時に意識が鏡の中に吸い寄せられる錯覚に捉われた。

(魂が引き合ってるって事なのか!?)

結論を考えた時には、意識が乖離するような感覚がして、次には何か熱い塊と交錯したような気がして、最後にはハッと目が覚めたように平常に戻った。

(何だ今の感覚は……)

我に返った弘樹だが、更なる異常事態を迎えていた事に気が付いた。目の前に広がる景色が違っていたのである。そこは保健室であり、魂が引き寄せられた結果として戻ったのであろうか？

いや、先生の姿が見当たらない。どころか自分が腰掛けていて、しかも机に向かっている事を知った。いつも村田先生が居る定位置だ。

「え？ どういう？」

思わず呟いて、自分が上げた声に驚いてしまう。響きが違って聞こえたからだ。喉を押さええてみて、また何か違和感が込み上げる。キョロキョロと見て、机の上に自分が落としていったプリントを発見する。それを無造作に摘もうとして、今度ははつきりと異変を発見してまった。紙片を掴もうとする自分の手が、細く色白いものになっている事を。

「んへえ！？」

自分のものでないような甲高い声を上げながら、弘樹は細く変わった自分の手と手を触れ合わせて確かめた。滑らかな触り心地と柔らかさは断じて自分の物である訳が無い。じゃあ、誰の物なのかといえ、また一つヒントを発見してしまった。袖口が白いのである。引つ張ってみれば、弘樹はいつの間にか白衣を着ていた事に気付く、更に視線は自分の胸元の異変を見つけてしまった。

「ええええ〜」

変化した掌で触ってみて、弘樹は自分の胸が膨らんでいる事を知った。柔らかな手応えは触った経験は無いが、女性の乳房のようだと判断出来る。

そして、触ると同時に見下ろして、下半身の変化も見つけてしまった。

紺色の布が腿の辺りまでしか覆っていないくて、脚は剥きだしになっていて毛など無いし形もまるで違うのだ。

(おいおい。これってどう考えても……)

弘樹は椅子から立ち上がると、揺れる乳房と弱々しくバランスの違う感覚に戸惑いながらも、何とか鏡の前に到達する。そして自分を映し出す筈の像が、村田薫子の困惑した表情に変わっているのを発見した。

(やっぱり！ 村田先生なのか!?)

ペタペタと自分の顔を触り、肌の違いを実感する。更には眼鏡越しの視界であった事に今更気づき、恐る恐ると弦を持ち上げて前方へとスライドさせる。するとレンズを通していない部分がボヤけて見える。

(んん)。村田先生のズレた眼鏡の顔……結構可愛ええ。けど、やっば見え難いなあ)

それから鏡に向かって色々な表情をするのだが、すぐに興味は肉体の方へと移る。

(おっばい……やわらけえ)

先程よりも入念に、弘樹は遠慮なく自分についている薫子の乳房を弄んだ。ブラジャーの締

め付けまでもが実感できる。

(ひよっとしなくても……アソコも先生の物に……なっているんだよな……)

腰布の奥へと興味が移る。性的興奮で頭が一杯になっているのに、相棒の呼応が感じられない。そこからも想像はつくが、やはり触って確かめたくなるものだ。スカートの上に掌を当てて、恐る恐ると股間に当てる。馴染みの障害物に接触する事なく、ペタンっと股の間に張り付いてしまう。

(うおっ！ やっぱチンコねえ……すげえ不思議な感覚だぜ！)

擦るように股を探り楽しむと、二の腕に触れる乳房も堪能したくなって、もう片手を揉みに向かわせる。鏡の中では白衣姿の薫子が、自分の身体を弄って痴態を繰り広げている。その映像も弘樹の心にグッと響く。

その時、お楽しみの終了を告げる合図が、扉が開閉する音と共に現れた。

「!? ちょっとおっ！ 何をしているの!？」

ヒステリックな男の声に慌てて振り返ると、弘樹はそこに良く見知った姿を発見した。

「え!? あれ? 俺え〜?」

「俺え〜? じゃありません! 私の身体で何をしているんです!」

「って事は、俺の身体を動かしているのは、先生なんですか?」

「じゃあ、やっぱり私の身体を使っているのは初芝君なのね!」

互いに身体が入れ替わっているという現状を理解し合う。そして確認が終わったならば次は困惑する番だ。

「まったく！ 一体、これはどういう事なのお！？ 医学的にも、こんな現実……認められないわ！」

ヒステリックに叫ぶ自分の姿に、弘樹は苦笑いを浮かべた。それに中身で考えても、普段は冷静沈着な村田先生が喚く姿は貴重な場面だ。

「ま……まあまあ……先生、ちよつと落ち着いて下さいよ……」

「そういう貴方は、こんな異常事態だっていうのに、私の身体を……弄ったりして……随分と楽しんでたみたいだけど……ひよつとして、これは貴方の仕業なの？」

「えっ。あつ。いや……そのお……身体を触っちゃったのは、ちよつとした男の好奇心で……先生の身体が魅力的ですし……」

「そういう世辞はいいから、これが関係あるんじゃないの！？」

薫子は手に握り縮めていた紙を『くらえ！』とばかりに提示した。それは勿論、皺くちやになつたアンケート用紙だ。

「この身体になつた時から、トイレで握り縮めてました。一体、どういふつもりだったのですか？」

目の前の自分に詰問されてはバツが悪い。それに上手く誤魔化す方法も思い浮かばない。だ

から弘樹は本当の事を掻い摘んで説明した。

「魂の通り道？ 特別な関係？ そんなオカルトありえませんか！」

ピシヤリと否定の言葉を叩き返すものの、考えてみればこの異常事態を引き起こすには相応しい。

「ふう……でも、そのオカルト以外には考えられませんね。でも、身体を入れ替えるなんて勝手過ぎます」

「すいません。まさか俺もこんな事態になるなんて、思いもよらなくて。その……本当に先生と特別な関係になりたかっただけなんです！」

自分の姿で告白に近い言葉を紡がれて、薫子は弘樹の顔でフッと笑みを浮かべる。

「お気持ち嬉しいですが、生徒と先生のケジメはつけなくてはなりません。それにしても、確かに『特別な関係』ですね。身体が入れ替わっちゃうなんて体験は……」

良い雰囲気弘樹は胸をドキリとさせて、そのセリフを吐いた姿が自分なので複雑な気分になる。

「じゃあ、もう用は済んだのですから、元に戻りましょう！」

薫子の言葉に弘樹は驚いた。

「戻り方知ってるんですか！？」

「同じ方法を試せばいいだけじゃないの？」

確かに道理だ。早速に同じ状況を作るべく、それぞれにアンケート用紙を握りしめて、保健室の壁に掛けられた鏡の前に向かう。

「相手の事を念じればいいのね？」

二人で鏡の前でうんうんと唸ってみたのだが、一向にあの時のような感覚は訪れ無い。

「身体が違うから、それに合わせないといけないのかしら？」

それから暫く色々な組み合わせや配置を試してみるのだが、一向に元に戻る気配が無い。すると今度は、二度と戻れないのではないかと、焦燥感に駆られてくる。

「もう……どうなっているのよ……」

「あれかもしれませんね……呪文が効くのは一日に一回とか？」

弘樹は何となく口にしてみたものの、如何にもそれっぽいし、望みが繋がった気分にもなる。「そうかもしれないわね。すると……今日は……」

互いの視線が交差する。身体が入れ替わっている以上対処する方法は少なく、すでに夕暮れに包まれているから時間も既に無い。

「身体が属する家に帰らないといけないのよね」

「まあ……しょうが無いですよね？」

言葉を出しながら弘樹は薫子の頬を緩めていた。

「あなたを信じて身体を預けるんだから、変な事には使わないうで頂戴！」

薫子は弘樹の顔で懽然とした。

それから二人は保健室の戸締りをして職員室に向かい、教えあつた住所をネットの地図で調べて印刷する。弘樹は薫子として職員室での報告事項やら挨拶を教えられるままに行い、職員用の下駄箱で本物の薫子と合流した。

「これが私の……今は貴方の靴だから」

手渡されたのは女物の踵が高くなつた代物だから、弘樹は一瞬ぎよつとする。すっかり替つた細い足先を通せばピッタリと収まるのだが、初めて履くハイヒールのバランスに戸惑つてしまふ。苦心しながら何歩か進んでみても不安が募る一方だ。

「せ……先生……ローファーとか持つてないんすか？」

「生憎だけど用意してないわ。何とか頑張つて頂戴！」

慣れない足取りヨロヨロと進む弘樹を支えるように、薫子は横にピッタリとついて歩く。端から見れば教師と生徒が仲睦まじく歩いているように見えるだろう。

夜の帳が降りた路上を駆まで進んで行く。途中で自転車通学である弘樹の愛車を受け取つたので、薫子はそれを押しながらの行軍だ。道すがらに情報交換が行われたが、一人暮らしである薫子の方が一方的に弘樹の家庭事情を覚えさせられる。それと口調も注意するように指導された。

「解つた。気をつける。替わりに、そつちは部屋とか身体とか弄らないように！」

最後に、「明日は朝からそっちに向かうから！」と言付けをして、薰子は不安そうに自分の後姿を見送ると地図をざっと眺めて自転車に跨った。

カッソツンとヒールの音を打ち鳴らしながら、一人になった弘樹はムフッと早速の笑みを浮かべていた。刺された釘など意にも介さずに、鼻歌交じりでホームとは違う場所へと足を向ける。そして青と赤に別れた入り口を見やって、ゴクリと唾を呑み込みながら折角ではなくても赤の方の入り口を選ぶ。禁断の場所も今ならば疑う者もないだろう。それを証明するように、鏡の向こうには薰子の姿が映っている。

「うほほお。本当に薰子先生になっているよなあ」

何度確認しても不思議な気分だが、まとわりつく長い髪も、鼻にかかる眼鏡の重みも、歩行の振動だけで揺れる胸も、腰を覆う布の頼りなさも、足に感じる重力も、体中から鏡に映し出された姿が正しいと伝えてくる。

(さて……このまま、ちょっと確認してもいいけど……)

個室だけが並んだ見慣れない風景を一瞥する。

(お楽しみは後に取っておくべきだよな！)

ポタンを一つ外して谷間を楽しみ、軽く胸を揉んでから鏡にウインク一つ投げて、弘樹は女子トイレを尻を振る絶好調な足取りで後にした。電車に乗り込んで暫く揺られていると、周りからの視線を実感する。向かっている先は、どうも先程開いた胸元に集中しているようだ。弘

樹は、こそばゆさと同時に優越感がゾクゾクと背中を駆け巡る。

(ふふふ……いいだろ！ この胸！)

持たされたシオルダーバックという荷物を掛け直す振りで、胸を弄るような動作をわざと見せ付ける。チラリと周囲を見れば男達がゴクリと唾を呑み込んでいる。

(手玉に取っているみたいで面白えなあ)

見られる快感を覚えながら電車移動を満喫し、指定された駅で降りて地図を見ながら歩く。

「ここが先生の家かあ」

村田と表札の掛けられた独身者用マンションの一室を前に、女性の部屋に潜入するという感動が沸き起こってくる。

「お邪魔します！ いや、ただいま♪」

早速と窮屈な思いをしたヒールを乱暴に脱ぎ捨てて、弘樹は内部へと上がりこむ。鞆もテールの上に適当に放り投げて、スカートの裾が翻るような勢いで室内を物色する。

「結構散らかってんなあ」

無遠慮な感想を呟きながら次の行動に頭を巡らせる。やはり自分の部屋に帰ったら、まずは着替えでしょう！ 最初からその気であったのであろう、弘樹はニヤニヤと頬を緩ませながら、発見した全身の映るサイズの鏡前へと移動する。映し出される姿に笑みを浮かべ、まずは服の上から身体を弄ってみる。おっぱいの弾力は何度触っても最高だし、股間に何も無い感覚は不

思議なものだ。

「それじゃあ……まあ……」

上着を放り投げてブラウス姿になり、ドキドキしながらボタンを外していく。

「うおおお〜！」

鏡に映る薫子の見事な半裸に興奮の声を上げる。ベージュの色気無いランジェリーだが、カッブの中から零れそうな位の見事な半円球に唾を呑み込む。キツキツに詰まって形成された谷間には吸い込まれそうで、弘樹は遠慮なく細い指先を隙間に潜り込ませた。

「谷間あからのお〜。生おっぱい！」

指先でプニプニと乳房を突いて遊び、沈み込む感覚と触られる感覚に虜になる。存分に楽しんで後で続く工程に掛かる為に、スカートに手を掛けて探り当てたホックとファスナーを外していく。

「パンツもちよつとババ臭いなあ〜」

上下お揃いのベージュ色に不平を漏らしながら、弘樹は脚を開き腰を突き出すようにして股間を強調させ、そろそろと指を進めて布の上からペタペタと触る。

「あ〜。この向こう側がマンコかあ〜！ くう〜。確かに何か溝があるのが解るなあ。それに結構やわつこい！」

我慢出来ずにパンツを一気に脱ぎ去って、しげしげと鏡で観察する。

「おわあー。意外と毛がビッシリ生えてんだなあ」

ジョリジョリつと若草のような茂みを指で掻き分け、地面に触れて撫で回す。丘の柔らかさをたっぷり堪能してから、いよいよ核心部分へと迫っていく。

「マンコの入り口……唇みたいに柔らかけえ」

淵に指を掛けて徐々に中心部分へと攻め込んでいく。湿っぽい感触が指に絡みつき、内側に入り込む不思議な感覚と、ゾクゾクするような心地良さに弘樹は感動で打ち震えた。

「あ……んふ……何か妙に挿ってえ」

新たな感覚を楽しむのと同時に、視覚上では自分の大事な部分を弄くる女性の姿も堪能できる。

（先生え。生徒の前でそんな淫らな姿を晒しちゃ駄目ですよ！あれ？でも今は俺が先生なんだから……）

「弘樹くうくん。もつと先生のやらしい所を見てえ」

艶っぽい声が自分の口から零れ出して、耳朶に心地良く響く。鏡の中では薰子が脚を更に広げて、秘所を晒そうと躍起になっている。けれどもうまく見られない。

歯痒さにヤキモキしていると、弘樹は別の感覚が立ち込めていくのを感じていた。弄った所為だろうか？排尿感が突き上げてきたのだ。

「おしっこ？ 先生え小便したいのー？ いやあ。しょうがねえよなあ。生理現象だもん

なあ〜」

ウキウキした足取りでトイレを探し出し、便座と対峙して躊躇しながら腰掛ける。そして大股を広げた。勿論鑑賞する為だ。今まで生きてきた中で何度となくシてきた行為だが、いつもとは全く違う景色にワクワクが止まらない。

「うおっ！ 出てきた！ 女の小便！ ああ〜ん。何だこの感覚。妙にこそばゆいっていうか、お漏らししているみたいっていうか……落ち着かない感じだ」

シュワシュワつと排出される水飛沫は、男のソレを通るのと根本では同じでも勝手が半分違う。けれども排尿の快感は同じで、ふうーつと息を吐き出して余韻を存分に楽しむと、弘樹は続いでの行動に頭が切り替わった。

「拭かなくっちゃだよな！ 女は終わったら拭くんだもんな！」

散々と触って確認していても紙を千切って当てれば、また違う感覚が襲ってきて、いつしか弘樹は紙を離して指で直接秘所を弄った。

「ああ〜ん！ この指先に引っ掛かる小さい突起！ これがひよつとしてクリかなあ？ んはあ……すげえピリつと感じて、気持ちイイ！」

覚えたての頃のように夢中になって弄くり回す。すると身体の奥が疼くようにして、アソコから何か漏れるような感覚がした。

「うひゃあ〜！ これ愛液つてヤツかあ！」

ねちやりと掬い取った指先で確認し、反射的に匂いを嗅いで舌で舐め取る。味はしなかったが、仄かに甘い香りを感じた。尤も、それは身体全体から発せられる芳香が起因しているのかもしれないが。

「はあああん……なんか……なんか全身が感じてきたあ」

ゾクゾクと沸き起こる快感に全身を打ち震わせ、弘樹は手を忙しく動かしていく。軽く触れただけで、太腿もお腹も背中も抜群に気持ちイイ！

けれども一番ゾクゾクするのは大きな乳房だ。何せ触れるまでもなく、動けばブラとの摩擦だけで気持ち良いし、先端部分が男のアレのように主張しているのが解るのだ。

「乳首……硬くなっているよなあ」

ブラの表面から撫でるだけでは我慢出来ない。弘樹は背中に手を回して悪戦苦闘を繰り広げる。そして何とか外したならば、急激に開放された乳房が空中に放り投げられて、重力に支配される感覚を味合わされるのだった。

「うはあ。重てえおっぱいだよなあ」

垂れ下がる重量はブラをしていた時から感じていたが、実際に下から掬い上げると良く解る。タプンタプンと揺らして楽しむと続いては指に力を込めて、柔らかさを堪能するように揉み始めた。ムニムニとした弾力が心地良くて飽きない楽しさだ。

「ずるいよなあ。女はこんな楽しいもんブラ下げて！」

揉み続けながら、眼下に広がる弄ばれる乳房の光景に眼が奪われる。性的な興奮が募っていけば、アソコからまた愛液が滲み出すのが解るし、乳首がジンジンして屹立するのが目でも確認できる。

「ふわああ乳首……コリコリっとして……すげえ感じるうう」

色々と弄ってみれば、乳輪を撫で回しても先端を抓んでも、感じすぎて気が変になりそうだ。「はああふうう……おっぱい堪んねえええ！」

胸を弄っているだけで何回も射精できてしまいそうだ。いや、今は女だから、そんな明確なゴール地点は存在しない。だから快感に打ち震えても終わりが見えなくて非常にもどかしい。

絶頂……そう、噂に聞く男よりも何倍も凄いという快感の果て……弘樹はそれを目指して、胸をアソコを、そして全身を忙しなく愛撫する。

「んふう……はうふうん！」

どれ位か解らない程の努力が実を結び、気持ち良い渦の中に溺れるように、弘樹は甘い嬌声を上げて意識を軽く失う。それから心地良い痺れを伴う快感の余韻に身が包まれて、幸せな気分で力の抜けた全身を便座に預けた。

「やべえよ……女の快感やべえよ……」

まだまだ夜は始まったばかりだ。その事を考えただけでも身体が疼き、ジュンっとアソコが潤うのを弘樹は感じた。

翌日、鳴り響くチャイムの音で弘樹は目を覚ました。フラフラと立ち上がり長い髪を無造作に乱し、大きな乳房を揺らしてボヤけた視界で音源を探す。壁に掛かった機械から鳴っているようなので、止めようと指を伸ばして適当に押せば横のモニタが点灯し我鳴り声が響いてきた。

「ちよっと！いつまで寝ているの！早く開けて！」

スピーカーを通して響く男の声が、弘樹の脳にゆっくりと浸透してくる。暫しの後に自分の声だという事に気が付いて眼が醒め、大慌てで顔を近づけてスイッチを操作する。それから呆然と昨夜の惨状をボヤけた視界を眺め、どうしたもんかと途方に暮れる。

まず手始めにと眼を細めて眼鏡を探して視界を回復し、さて次はと思った矢先に二度目のチャイム音が鳴り響いた。今度は素早くスイッチを押して、廊下にただずむ自分の姿を確認すると、もうどうにでもなれと弘樹は玄関を開いた。

「おはよう。つて！？　ちよっとお〜！」

野太い怒号が浴びせられる。それもその筈だろう。薫子から見れば、一日ぶりに我が家へと舞い戻ってみれば部屋は惨憺たる有様だし、出迎えた自分の肉体に至っては裸なのだ。

「何をやってたの！」

「いや……それが……若い男の探究心といいますか……その………すいません」

「すいませんじゃないわよ！　こんなモノまで出してえ〜」

男の声で悲鳴を上げながら、薫子は床に散乱したピンクの物体を震える手で掴んだ。それは卵型をした振動する器具で、所謂ローターと呼ばれる性的な玩具だ。他にも男のアレを模した物体もある。

「いやあ。そのお。女って際限なく気持ち良いですよねぇ。そいつらには何度もイカされちゃいましたよ……」

あははは……と乾いた笑いで締め括られて、薫子は肩を震わせ無言で唸る。

「先生の方は、男の射精を味わってみました？」

弘樹の問いかけに答えず、薫子は言葉爆発させる。

「もう！ すぐに戻るの試してみましよう！！」

勢いに圧倒されて弘樹がタジタジしている間に、薫子は持参した用紙を二枚取り出した。それは勿論昨日のアンケート用紙だ。問答無用で手渡されて、鏡に向かって儀式を行う。けれども、ちつとも効果は現れない。

「何でえ！？」

「あー。やっぱりアレじゃないですかね？ 特別な関係になって無いからですよ。俺は先生の肉体の隅々まで弄っちゃう位に楽しみましたけど、先生は俺の肉体でオナニーしましたか？」

「する訳無いでしょ！」

「ほら！ お互いに相手の事を理解しようとしてないからっすよ！」

ニヤニヤと薫子の端正な顔立ちを歪めながら弘樹は、自分のだった薫子の股間をおもむろに弄る。

「ひゃう！」

「ほら……先生え。俺のチンポを起しててるじゃないですか。興奮しているんですよ？」

「だって……それは貴方が裸のままにいるから……」

「自分の肉体なのにですか？」

「これは……男性的な……単なる生理現象だから……仕方ない」

「じゃあ、男性的な性欲処理も知っておいた方がいいですよ！ 保健の先生として身を持って！」

弘樹は細い指先で薫子の猛りを誘うように愛撫する。元は自分のモノだから心得たものだ。

「んふう〜」

抗い難い心地良さが薫子の身体を駆け巡る。男性器が別個の生き物のように、脈打ち我慢出来ずに暴れているのがハッキリと解る。昨晩から何度も体験しては押さえつけてきた欲求だが、今は濃厚な女の匂いと微かに触れる柔らかさで理性が限界を突破する。

「わ……解った……するから……手を離して……」

解放されたもののジンジンと痛い位に主張して、ズボンの上からでもハッキリと解る存在感だ。促されるままに薫子は、ベルトを緩めてジッパーを下ろしていく。昨晩選んだ灰色のボク

サーパンツは、獐猛な中身によって持ち上げられていた。拘束具を解き放つように、薫子はゴムの部分に指を掛けて一気に下ろす。空に向かって雄雄しく咆哮するように、聳え立つ男性のシンボルが姿を現した。

「おお〜！ 我ながら凄えなあ〜」

自分のモノを反対側から客観的に見るのは変な感覚だが、それ以上に身体の奥底から目の前の牝に対する欲求が沸き起こってきて、弘樹はコクリと唾を飲み込んだ。

「ほら、先生。やり方は何となくでも知っていますよね？」

恐る恐るといった感じに薫子は手を伸ばし、ゴツゴツした掌で亀頭と竿の部分に触れた。そして緩やかに動かしていく。

（ん……ああ……ゾクゾクするう……）

男性器からもたらされる新たな快感が、薫子の脳を蕩けさせる。女よりも素早く手軽に得られる快感と、昂ぶる激しい性欲に早くも虜となって、手がドンドンと動いていく。

自分がシコシコとしている様子を客観的に見せ付けられて、弘樹はアホっぽい行為だったんだなあと思える反面で、やはり肉体の牝が呼応するように悶々としてきた。

「先生、俺の方も弄らせて貰うぜ」

「え？ ちょっと……」

目の前で自分の肉体を弄られて困惑するが、それよりも見事な豊乳が揉みしだかれる淫靡さ

に眼が釘付けになる。薫子は息を荒げながら手の中で猛るペニスに導かれるままに、眼前の女が乱れる様をオカズにして行為を続けていく。

鏡合わせのようにして互いに自分のオナニーを見せ合いながら、新たな性欲の自己発散に励んでいく。奇妙な状況は興奮の点火材の一つとなって、互いの性的ボルテージを一層高めさせていく。

けれどもそんな状態は長く続かない。刺激に対する快感曲線が短い肉体が、早くも終局を感じとったのだ。込み上げる射精感覚を察知して、薫子は周囲を見渡しティッシュを掴み取る。そして一気にマグマのように熱い欲望の塊が、先端より噴き出した。

「んふうー」

熱い吐息を吐き出し、薫子は自分が出してしまった結果を見下ろす。自分にぶら下がっているグロテスクな先端部分から、ドロリとした白い塊が零れてティッシュの上を広がっていた。見たのが初めてでは無くても、自らが排出したものと比べれば感慨深い、それよりも後悔の念の方が沸き起こってくる。それを後押しするように、放出後の倦怠感が一気に体を支配した。

「さあ！出した……から、早くもう一度試すよ！」

気だるさを無理にでも振り払うように薫子は宣言し、目の前で快感に耽る自分の肉体を揺さぶる。

「ああああ〜ん！ いい所だから、もうちょっと待ってえ！」

成りきるような口調と仕草にイライラとする。幸いにも筋力も逆転しているから、力づくで止めて用紙を掴ませる。そうして再び儀式をするのだが戻る様子は見られない。

「そんなあゝ。どうしてえ〜」

薫子は泣きたい気持ちになるのだが、何故だか上手く作用しない。そんな様子にバツが悪い思いがするのだが、それ以上に弘樹は絶頂に到達していない疼きに苛まれて次の提案が頭に浮んだ。しかし、それは流石に躊躇するものの、肉体が男を求める声には勝てず言葉紡いだ。

「先生え……やっぱりさあ、特別な関係っていったら男女に於いては一つじゃないかと」

「えええ!？」

すぐに察して薫子は頭を左右に振りかぶる。

「駄目よ! 絶対に駄目だから! 教師と生徒で……男女の関係になる……なんて……」

「俺だっで自分とするのには抵抗がありますよ。でも俺は別にこの肉体のままでも、楽しくやっでいくつもりですけど、先生はそれでいいんですか?」

沈黙の後に薫子は唸り声を上げながら激しく葛藤していたが、やがて小さな声で「解った。しましよう」と答えが返ってきた。

「んじゃ! ほら! 先生え早くう俺の肉体を弄つてえ〜」

「ま……待ちなさい……ゴ……ゴムを準備しておかないと……」

「いいじゃん。そんなの!」

「駄目です！最低限のケジメです！」

しかし室内には用意が無いらしく、弘樹が外への買出しに行く事になった。ノーブラのまま
で着替えようとする弘樹を押し止め、まずは下着の着用からレクチャーが始まる。続いて最低
限のメイクや髪を梳かす作業が入り、弘樹は女の外出に掛かる面倒臭さを思い知らされた。

「これでいいんだよな」

弘樹は半透明なコンビニ二袋から、不透明な小さな紙袋を取り出す。店員が気を利かせてくれ
た訳だ。薫子は無表情で受け取って、あくまで事務的に中身を確認して開封する。葛箆折りに
なった中から先端の一枚を千切ると、淡々と男根に装着した。

そんな一挙手一投足を、元の持ち主が感慨深げに眺めている。男に成長する瞬間でもあるし、
女の立場としては今から戦う相手でもある。だからエール代わりに、準備完了した相手に差し
入れを渡す。

「さあ！ これでも飲んで精力つけて頑張つてね！」

面白がる様子にキッと睨み返すも、薫子は受け取ってぐいっと煽る。咽返るような味だが身
体がポカポカと温かくなり、目の前にいる女の香りが急に鼻腔を擦って、性器が膨張するのを
感じる。

「お〜！ 先生えやる気だねえ〜」

ゴムを被った元の相棒の元気な姿に、弘樹もドキドキ胸が高鳴ってブラウスのボタンを外し

ていく。自分が生脱ぎしていく姿に、男となった薫子の体内で興奮が駆け巡っていき目が離せない。

(私ってこんなに魅力的だったのね……)

誘われるようにフラフラと、胸の谷間へと引き寄せられていく。教えられた通りにブラを外す作業をしていた弘樹から、奪うようにして揺れる果実を掴み取る。

「ちよっ……先生え！ いきなり、そんな乱暴……でも……んふう。なんだこれ……気持ち悪い！」

「そうでしょ？ 私の事は私が良く知っているから、黙って感じなさい！」

乱暴に乳房を弄られ、太い指先で乳首が摘まれる。激しい愛撫は昨晚自分で弄った以上で、弘樹はたちまち甘い嬌声を漏らして感じ入った。弄っている側の薫子としては、悶絶する自分の表情に恥ずかしくなりながらも、自分だと思わなければ女の扱いには慣れている。それに男の身体で行為を行っていると、激しい興奮が沸き起こってきて楽しくなってくる。

存分に下準備をしたならば、続いては場所を寝室へと移す。弘樹のたつての希望により、大きめの鏡をベッドの脇に移動させた。

「先生えー！ いや、弘樹くうん。こっちも弄ってえー」

大股を開いてベッドの上に陣取り、弘樹がそんな演技で薫子を誘う。かばあ〜と音が聞こえるような勢いで花びらを捲り、我慢できずに中の蜜を自分で掻き回す。

淫乱なまでの姿に苦笑を浮かべながらも、薫子は自分のだったアソコに顔を近づける。こんな風にして観察するのは初めてだから妙な気分だし、男の立場としては濃厚な牝の匂いに奮い立つ思いだ。流石に舌を使うのは躊躇って、いつもの要領で指を動かしていく。

「んふう〜」

クチュクチュと卑猥な水音が立つ程に弄られ、巧みにクリを刺激されて、弘樹の脳にホワイトノイズが走り軽くイキかけた。十分に潤った事を確認すると、薫子は猛る股間のモノに急かされながらも、やはり倫理と倒錯感から躊躇してしまふ。けれども戻りたい一心を口実にして、男性本能に突き動かされるようにゴムに包まれた先端を押し当てる。

反対側では弘樹が陰唇を擦る異物感に目を強張らせていた。中に押し入ろうとするのは自分の姿だとはいえ、やはり男のモノが入ろうかという状況は怖いし生理的に嫌だ。

互いに葛藤しながらも、肉体に起因する性的な欲求には抗えない。心の中で何度も釈明を繰り返しながら、薫子はついに腰を動かしていく。その瞬間に、「んはあ〜」と熱い吐息が互いに絡みついた。

(なんなのコレ……コレが私の中の感覚なの!?)

ゴム越しだとはいえ、狭い締め付けと熱さが敏感な男根を通して伝わってきて、薫子は快感を求めて奥へ奥へと進んでいく。

(身体の中に、俺のアレが入ってきて変な感じ……だけど、それが結構気持ちいいかもお〜)

一突き毎に互いに生まれる快感に夢中になっていく。薫子は女を犯している気分が高揚し、揺れる乳房を掴み唇を吸い寄せて、より深く味わおうとする。複数の箇所を同時に攻められて、弘樹は全身が泡立つ快感で脳内が一杯となり、甘い息で喘ぐ事しか出来なくなつた。

快感が昇り詰めていく男女であつたが、やはり先に頂点に達するのは男の方である。二度目の射精による満足感が薫子の全身を覆い、同時に達成感と疲労がドッと押し寄せて動きが止まる。荒い息を上げながら、欲求に負けてしでかしてしまつた事に対する後悔の念も押し掛かってくる。

反対に下で喘いでいた弘樹は、快感に没頭していた最中で急に終わってしまった、不満で一杯だつた。二回続けて絶頂まで到達できなかった所為もあつて、男の側がさつさと引き抜こうとするのを脚で挟んで制止する。

「まだ俺イってないから、ちょっと待って！」

そして薫子が戸惑いの声を上げるのを他所に、弘樹は下から腰をくねらせて、貪欲に肉棒の振動を得ようとする。

「ちよつと休ませてえ〜」

「じゃあ、俺が上になるよ！」

体勢を入れ替えて攻守が逆転する。身体的には熟女が若い男を襲う構図だが、精神的には順当な形だ。重力も加味された事でより深い結合となつて、弘樹は奥まで抉られるような快感に

夢中になって体を上下させる。下の方では薫子が、淫乱と化した自分の肉体を見せ付けられて困惑し、けれども強制的に扱われた肉棒からの快感で脳内が混乱する。

そして倒錯的な状況から一気に射精感が高まり、ついに三度目の射精をゴムの内側に打ちつけた。けれども上に乗った雌は満足に到らなかつたらしく、乳房を男に打ち付ける程に激しくヨがりながら動き続けている。出し続けて疲弊した薫子は自分の肉体を恨めしく思う。性に關する不満から男との交際が長続きしなかつたのだが、自分がそちらの立場になってみれば生半可では相手が務まらないと思知らされる。

薫子が呆然としている中で、弘樹は熟した女の肉体を激しく揺らせて快感を貪り尽くしている。余計な事は頭にはなく、ただただ快楽を求めるだけだ。そうして薫子が四度目の射精を終えてウンザリしてきた頃に、ようやく弘樹は身体を痙攣させて絶頂の果てに旅立つ事ができた。

自分の肉体に馬乗りになった弘樹は、荒い息を上げながら快感の余韻に浸る。男の硬い感触に縋りつき繋がったままだというのに、何故だかそれが凄く幸せに感じる。薫子はようやく訪れた休息に安堵し、やはり柔らかい女を抱いて繋がったままだという状況に、不思議な征服感で満足に浸っていた。けれども幸福は長くは続かない。

十分に休息し、たっぷりと搾り取られた痕跡を片付けて、ようやく本来したかった元に戻る方法を試すのだが、結果は同じく戻れないというものだった。

「どうしてよお〜」

男の悲痛な声が室内に木霊する。

「しょうがないよ先生……しばらく生活を交換して様子を見るしかないよ……」

確かに戻れない以上はそうするしかない。その為にはお互いに色々教え合うより他にない。休日の残りの時間は、その為に費やす必要があるようだ。けれどもまずは、汗や他の体液を洗い流し落ち着く為にも風呂へ入る必要があるようだ。



昼下がりの保健室に長らく響いていたハイトーンボイスが途切れた。薫子の声で語り終えた弘樹は、机の上の湯呑を一啜りして息を吐き出す。

「マジかよ……お前、自分とセックスしたのかよ……」

「ああ、自分の筆下ろしをしちゃったぜ！ 最初は抵抗もあつたけど、女の快感はマジ凄くて超感じ捲くりで、アタシ淫乱になっちゃったあ〜」

艶っぽいボイスに再び松村勝はゴクリと喉を鳴らせた。長い語り中でもずっと興奮していたから、アソコの方はピンピンと突っ張っていて痛い位だ。ズボンの上からでも解るビクビクと動く様子を、椅子に座った弘樹が注視していてニヤリと形良い唇を歪ませる。

「できあゝ。松っちゃんの筆下ろしもしてやろうか？」

「はあ？ お前、何を言つて……!？」

勝の言葉は途中で驚きの声に変わる。弘樹が細い手を伸ばして股間を擦り始めたからだ。

「おほおほ。松っちゃんの凄くでかくねえ？ マジかよ、こんな巨根だと思わなかったなあゝ。アソコに入ったら、どうなっちゃうのかしらあゝ」

「おい。弘樹い、やめろつて！ 先生の身体で、そんな勝手な事して……」

「大丈夫だつて！ 今は俺の肉体だし、お前だつて『保健室の誘惑』とか大好きだろ？」

喋りながらも弘樹はズボンの上からのマッサージを止めず、細く柔らかかदैて乱暴な動きがもたらす快感に、勝は腰を引いて何とか耐えようとする。昼休みの性的な攻防は、突然の扉の開閉音と続く男の声によつて中断した。

「気になつて来てみれば！」

入室してきた男子生徒は初芝弘樹の姿だった。つまりは薰子本人の登場だ。

「いや、これは……治療ですよ？ な？」

「廊下まで変な声が響いていたぞ！ ……勝手な事をして私の評判下げないでよ……」

最後は小声で抗議してから、薰子は第三者の存在にハツとする。

「いや。松村君にも今、事情話したから大丈夫つすよ！ そんな訳で松っちゃん。こつちの俺の姿をしているのが村田先生だから。何かあったらフォローよろしくな！」

あつどうも……と勝と薫子は反射的に頭を下げ合った。それから三人で暫しの報告と情報交換を行い、昼休みの終了と共に生徒の二人は並んで保健室を後にした。

その日の放課後、中央情報処理室の一角では哑然とした空気が流れていた。何で保健の先生がこんな場所にも思う間もなく、例の現象の報告が行われたからだ。

「す……すると……初芝殿が村田先生殿で、村田教諭殿が初芝殿という訳で、ゴザルのか？」
奇妙な言葉遣いに薫子は目を丸めながらも頷き、弘樹は艶やかな声で「だから、そうだって言ってるだろ！」と言いつつ放った。

色々と聞かされて見せ付けられた勝でさえも、もう一度聞いても俄かには信じがたい話だ。新たに報告を受けた二人が戸惑うのも無理は無い。

「そんな訳で、例の『特別な関係』ってヤツは身体が入れ替わっちゃうっていう、まさに特別な関係だった訳だぜ！」

ニヤニヤと下品な笑みを浮かべながら、弘樹は胸を逸らせて強調するように見せ付ける。勝ち誇るような仕草に、薫子を除く男達は羨望の眼差しを送る。

「それより、そのサイトは立木君が見つけたって聞いたけど、どうやって見つけたの？ 私達も確認しようと思ったけど、うまく見つからなくて」

薫子の問いに春夫は「普通に検索サイトで見つけた」と答えた。端末の一台で試してみるが

うまく引つ掛からず、キャッシュすらもヒットしない。

「あれ？ おかしいでござるな……前はこれでヒットした筈なのに」

今度は覚えているアドレスを打ち込んでみた。そして表示された画面に啞然とした。

「『当ページは閉鎖しました。魂の通り道を開きし者達に、新世界の光があらん事を！』って何……これ……」

文言を読み終えて薫子は絶句し、目の前が真っ暗になった。何か方法があると思っていた希望の綱が断ち切られたからだ。もう元に戻れないかと思うと、クラクラと意識も遠くなる。

弘樹も一生このままかもしれないという通告を受けて、流石に動揺はしたものの薫子程ではなく、ならば身体に合わせて新しい生活……いや、性活を構築しなくちゃな、と考えを巡らせていた。

それから絶望に打ちのめされた薫子は新たな家路につき、弘樹も新たな持ち場となった保健室へと引き上げて行った。残った面々は互いに顔を見合わせて考えに耽る。

『あの方法で運命の相手と入れ替われる』

『そして元には戻れない』

正に禁断の秘術を手中にしている訳で、それを実行したいのか、するべきなのか、葛藤と妄想が脳内で渦巻くのは仕方が無いであろう。考え込んでいる三人の男達は、突然身体を振るわせた。そして一様にポケットから携帯電話を取り出す。

「弘樹からだ……」

「僕も……」

「拙者も……」

どうやら同時に発信したものらしい。文面は『女の身体は最高だぜ！おっぱい揉み放題で快感はすげーし、気分もいいぜ！チンポが無くなるのは寂しいけど！みんなもこっち側に来いよ！何なら入れ替わる方法の手助けしてやるぜ！』と書かれていた。読み終わって、また一回の喉が鳴る。続いて妄想の華が開いたのか、ソワソワと落ち着きが無くなった。

「ちよつと、さっきのサイトについてキャッシュを漁ってみるでござる」

春夫は心を落ち着ける為にだろるか端末に向かい、剛毅も「ちよつと……」と言って部屋を後にしてしまった。勝は暫く春夫の作業を眺めたり別の端末でボンヤリとネットサーフしてみたものの、身が入らずに帰宅する事にした。頭の中は『俺が入れ替わるとしたら……あの金髪美少女になれる』という事で一杯だった。そして、なりたいのか、なってみたいのか、一生そのままだとしてどうか？と深い所までも考えてしまい思考停止に陥っていた。

（弘樹のヤツは何でこんなに、お気楽なんだろうな……）

勝は携帯画面を見ながら、夜も思い出しては考えこみ、そして昼間された事までも蒸し返して、ついつい手がナニへと伸びて大変に捗った。

一方で中央情報処理室を離れた五条剛毅は、倒錯と淫靡の世界に脚を踏み入れていた。向かった先は保健室で、ノックをして中に入る。

「来たな」

椅子を回転させて弘樹は端麗な顔に下卑た笑みを浮かべて出迎えた。

「な……何の用でしょうか……」

事情を知らされているとはいえ、目の前に居るのは先生なのだから剛毅の言葉には躊躇いが感じられる。おどおどとした少年といった姿は、前から可愛らしいなあとは思っていたが、女の立場から見ると衝撃が増して弘樹はキュンッと胸が高鳴った。

「そんなにかしこまらなくてもいいぜ、中身は俺なんだしよ！」

「う……うん。それで……用件って？」

「単刀直入に言うぜ！ お前、女になれよ！」

「ええ〜！ 僕が『女みたいだ』って言われるの嫌いだって、知ってますよね？」

「だから本当に女になっちまえばいいじゃんか！ それに、その身体を変えるんじゃないかって例の入れ替わりでだぜ！ お前の『運命の相手』って松雪先生だろ？ どうやら村田先生……今は俺と大学の先輩後輩らしくて、随分と慕われているみたいだから、チャンスは幾らでもある訳さ！」

説得の言葉に剛毅は少々考え込んでいたが、口を開いて出たの次のような否定の言葉だ。

「で……でも……やっぱり女になるなんて……ちよつと考えられないし……それに松雪先生にだつて悪いよ……」

「そうか、残念だなあ……」

あつさりと思つたのもつかの間に、弘樹は次の提言を繰り出す。

「じゃあさ！ 俺……いや、私とエッチしない？」

「ええ！？」

「女になるのは嫌なんだろう？ ならば、大人の男になつちまおうぜ！」

いきなりの事態に唾を呑み込むが、すぐに弘樹の頭が切り替わる。

「いやいや……何でいきなりそんな。村田先生にだつて悪いよお」

「だから、今は俺が村田薫子なんじゃん！ 一生このままかもしれないのは、お前も知っているだろ？ だからシたい時にする権利は俺にあるの！」

弘樹の堂々たる宣言に一瞬納得しかかるが、剛毅の理性はまだ崩れたりはない。

「いや、でも……中身が初芝君だったら、男とエッチする事になるよね？ それはちよつと……」

「大丈夫だつて！ 肉体は見ての通りだしよ！ すぐに気にならなくなるって！ ほら！

ちよつと触ってみるよ！」

強引に手を掴むと、弘樹は自分の胸元へと導く。開かれたブラウスから豊かな谷間が覗き、

熱帯花のように濃厚な甘い芳香が鼻を撲る。男性として奮い立つのを後押しするように、剛毅の掌に今まで味わった事のない、しっとりでもっちりとした柔らかな感触が広がる。

「おおう！　しっかり勃起してんじゃん！」

乳房の感触に夢中になっている間に、弘樹はもう片手を動かして剛毅の股間を弄る。ズボンの中で膨らんだナニの手応えは随分と頼りないモノで、精一杯背伸びをしようと頑張っているように思えて、弘樹の心に母性に似た暖かな気持ちが溢れてくる。

「や……やめてよ……」

弱々しい拒絶の声が可愛らしくて苛めたくなくなり、弘樹は指先に力を込めて扱っていく。剛毅は腰を浮かせはするものの、逃れたり振りほどいたりはいはしない。

「止めて欲しかったら『エッチしたいです』って言ってよ」

逡巡している間にも股間を這い回る手は緩まず、ついに剛毅は我慢も限界に近づいて声を上げた。

「……む……村田先生と、エッチしたいです……」

「よく言えたな！」

指先が解放され、安堵と共に射精感が込み上げて来る。

「ほら、褒美にコレをあげるから、そこでシこって仕事が終わるまで待つてな」

手渡されたティッシュの箱を掴み取り、剛毅は指示通りに白いカーテンに覆われたエリアへ

と駆け込んでいく。大慌てでズボンと下着を脱ぐと、興奮を紙上へと吐き出した。同時に後悔の念がドつと押し寄せる。

(とんでもない事になっちゃったなあ……)

けれども思い返してみれば、状況的には美味しい訳で、剛毅の男性自身は素直に反応していた。それから悶々としながらベッドの上で過ごし、うとうとしかけた頃になってカーテンが開かれる。流石に保健室で続きをするという訳にもいかず、村田先生の家へ移動する事になった。校門で待ち合わせをして、並んで駅へと向かう。中身としては男友達同士なのに、姿を見れば教師と生徒だ。これからする事もあるし、気まぐずくて無言のままに歩いていく。

「ついで。ここが俺の城だ」

自分で苦勞した訳でも無いのに、誇らし気に宣言して弘樹は鍵を開ける。女性の部屋へ潜入するとあつてドキドキしながら剛毅は付き従うが、散らかった室内の惨状に呆気に取られる。

「シャワー浴びるだろ？ 何なら一緒に入るか？」

「え？ いや……ひ……一人で入るよお」

剛毅は慌てて弘樹から離れて、指示された浴室の方へと逃げ込む。ドキドキと胸を高鳴らせたままに服を脱いで、蛇口を捻って湯をザつと身体に流して一息をつく。

(……これからエッチするんだよね……でも最初の相手としては、ちよつと複雑だなあ……)

剛毅は中身を余り考えないようにしようとして心に決める。そして肉体だけを考えれば、自然と

奮い立ってくる。けれども、その怒張具合に関して溜息が漏れてしまう。

シャワーを浴び終えて、服を着るのは変だよな……と剛毅が逡巡している時に、いきなり扉が開かれた。そして裸の女性が眼に飛び込んできたので気後れしてしまう。

「なんだ残念だな。一緒に入ってサービスしてやろうと思ったのによ。まあいいや、タオルでも巻いてテーブルの上の飲料でも飲んで待っててくれよ！」

大きな乳房を揺らせながら弘樹は入れ違いに浴室へと入り、剛毅はテーブルの上に置かれた精力剤にギョツとしながらも飲み干して、内側から火照る身体でベットの上に座り落ち着かなく過ごす。

「待たせたな！」

一糸纏わぬ姿で弘樹が現れた。勿論薰子の姿だから、惜しげもなく曝け出すのは大人の女性の見事な肢体だ。全身に立ち上る湯気と紅潮した肌が艶っぽさを一層醸し出している。妖艶な雰囲気と初めて生でじっくりと見る女性の裸に、剛毅は唾を呑み込み股間が暴れ出してタオルを持ち上げる。

硬くなる男の子の姿に弘樹は笑みを浮かべながら、大股で歩み寄るとベッドの上に隣り合わせで腰をドカッと下ろした。

「まあまあ緊張するなって、ちゃんとリードしてやるからよ。まずは、じっくりと女の身体を見たり弄ったりしたいだろ？」

乳房を重そうに持ち上げて、剛毅の頬にウリウリと擦り付ける。頬に当たる柔らかな感触を伴った挑発に、剛毅の理性も吹っ切れて、本能のままに乳房に喰らいついていく。指と鼻と舌とが這い回り、乱暴さと必死さが伝わってくる男の子の愛撫に、弘樹も快感が高まっていく。

「乳首を吸ってもいいわよぉ〜」

言われるがままに剛毅はピンピンに勃起した先端を口に含み、グミを舐めるように舌で転がして味わう。大きな子供ができたようで、弘樹の中に快感と共に母性愛が高まっていく。

乳房の次に興味が向かうのは、男にとつての永遠の秘境だ。ジャングルに覆われた自らの大地を、弘樹は慣れた手つきで掻き分けて秘仏を公開する。閲覧者は初めての興奮で眼がキラキラと輝いている。陰唇が左右に引っ張られると、赤黒い中身が露になる。生々しい映像は少々グロイのだが、愛液によってテラテラと輝く姿は艶かしくて魅了される。更には主導しているのは男心を心得ている弘樹だ。躊躇う事無く穴の奥の奥までも、魅せつけるように公開する。

「どうよ……女のアソコは？」

「色々……凄いね……」

「俺の方からだと鏡使っても見づらいからさ……ちよつとその携帯で撮影してよ！」

剛毅は言われた通りに作業を行い、自分の携帯も使う。

「ほら！ クリの方も撮っておけよ！」

一頻りの鑑賞撮影タイムが終了したら、続いては情報を活かしての愛撫タイムだ。剛毅の指

が忙しく乱暴に動いては、弘樹の快感を高めていく。準備が整ったならばいよいよ本番となるのだが、手渡された避妊具に剛毅は戸惑ってしまう。

「どうやったらいいのかなあ？」

「俺も良く解らないけど貸してみ。装着してやるよ」

再びゴムを受け取ると剛毅のモノと対面する。股間で屹立しているものの、それは聳え立つという迫力は無く可愛らしい印象を与える。

「んふふ。可愛らしいよね……お前の……」

「ちよっ……」

コンプレックスの源だから反射的に手で覆い隠してしまう。

「悪い悪い。まあ、だからこそ今から男になるんだろ？」

論して手を開かせて先端部分に装着させようとするが、その前に被ったままの先端部分が気になり、指で無理矢理押し広げて露出させようとする。

「痛う〜」

再び腰を引いて逃れていく。

「あゝ。ごめん。まだ完全包茎のお子ちゃま仕様だったんだな……」

剛毅は無言で睨み抗議するが全然迫力は無い。それから黙々と作業が行われて、ついに中身は兎も角として男女が相対する場面を迎えた。

「ほらほらあゝ。予習したでしょ？ ここに入れるんだぜ！」

大きく股を開いた女教師の誘惑に導かれて、少年が腰を落として淫靡な溪谷に最先端を進めていく。初めての作業に手間取り、今更ながらに目の前の相手に対して戸惑いを覚える。

「ほ……本当にいいんだよね？」

「どうした？ 怖気づいたのか？ 大丈夫だって！ 男を見せるよ！」

「いや……その先生の身体に勝手にこんな……」

「本当に今更だな……しゃあない……」

弘樹は咳払いすると艶かしい声を作り出す。

「ほら、剛毅君しつかり！ 先生との保健体育の実習頑張るのよ！ そのまま、腰を動かして中に入ってきてえ〜」

作られたシチュエーションと言葉であつても、単純な男の脳内には心地良く聞こえて、ヤル気が奮い立ってくる。剛毅はゆっくりとだが確実に前進し、ぐにゅぐにゅと感じる開口部の抵抗を押し退けて、内部へと突入を果たした。熱く滑った複雑な圧迫が薄膜を通して、剛毅の敏感に伝わってくる。今まで感じた事の無い快感が脳を襲う。

「うっううう〜」

情けない呻き声を上げて剛毅の腰が打ち震えた。途端にぐてつと、前のめりになって乳房に顔をダイブさせる。

「お……おい……まさか、もういったのか？」

「ご……ごめんなさい……」

完全に挿入しきる前に早くも達してしまい、情けなさど快感でヒドイ表情だ。

「まだ大丈夫だよな？ 連続でいけるだろ？ ほら！ 男らしく立ち上がって腰を振って！」
入ってきたと思う間もない終焉に、弘樹は叱咤の声を上げる。剛毅はヨロヨロと乳房から顔を離し、体勢を立て直して、精一杯に腰を突き動かす。懸命な顔が微笑ましく弘樹の目に映り、最後まで到達した筈なのに内側から感じる衝撃も少なくて、それがまた可愛くて応援したくなる。

けれども、剛毅の奮闘ぶりもすぐに終焉を迎えてしまう。本能のままにぎこちなくも、出して入れてを繰り返したのだが、今度も僅か数回のピストン運動で終焉してしまったのだ。

「うううう」

胸の谷間に顔を埋めて快感の余韻と後悔の念に駆られる姿は見ていて心が温かくなるのだが、受けて側の快感としては入り口に立ったばかりで全然満足していない。

（つたく……しようがねえなあ……コイツは……）

呆れながらも弘樹は剛毅の頭を優しく撫でて、休憩終了後はこっちの主導で特訓してやろうかと思いい立ち、子宮がキュンッと疼くのを感じるのであった。

翌日も松村勝が登校すると、教室の外にまで広がる見物客の群れを確認する事が出来た。眺めるだけならば授業中にも可能だが、お近づきになる為の接点を作るのは相変わらず簡単ではなさそうだ。

やはり、あの方法を試して俺が成り代わるしか無いだろうか？確かにそれならば鏡を覗くだけでいとも簡単に麗しい姿を見れる。いや見るだけでなく触る事も、弄り回す事だって出来る。しかし、今の男の立場として近づきたい訳だし、入れ替わるといふ事は相手に自分の身体を押し付けるのだ。それがどんな結果をもたらすのかという答えは、同じ教室の一角に沈殿した空気を見れば解る。

「おはようございます……先生」

ざわめく室内だから気にする者も居ないだろうが、一応気をつけて小声で初芝弘樹の姿をした村田薫子に話しかける。

「おはよう……」

明らかに元気の無い声と顔が現れた。

「大丈夫ですか？」

「今朝も、ちよつと保健室に寄ってきたんだけどね……」

そこで一旦言葉を濁し、それから「保健室に近づかないでね……」と短く付け加えた。勝は黙って頷いておいたが、原因が気になって仕方が無い。けれども、じきに原因が解る。短い振

動に携帯を取り出すと、添付付きのメールが薫子名義で届いたのだ。

隠れて覗きみて勝はギョットとなる。その画像は薫子と剛毅が裸のままに繋がっている姿だった。ぐったりと疲れた様子の少年を抱きしめ、眼鏡の奥の瞳を艶やかに細めてVサインをしている。極めて扇情的な写真だから、忽ち勝の男が反応する。

『剛毅きゅんの童貞頂きました。可愛らしくて中々の美味だったぜ！次は松っちゃんのカチンポも味見したいなあ』

文面を見て頭が痛くなる。このノリのままに來られたならば、当の本人には堪らないだろう。現に呟きに耳を澄ませば「私の評判があ……」と何度も呻いているではないか。

(いくら何でも女に嵌りすぎだろ……友人とシたがるなんて可笑しいんじゃないか?)

けれども懷疑心と嫌悪感の隙間から、『それだけ女の身体が凄いのか?』という好奇心が湧き上がってくる。

(女の生活は楽しいのか?)

勝は教室を見渡し、楽しみに会話する女子や、人だかりの隙間から見える金髪の輝きに眼を細める。そして女の身体で、同じようにしている自分を想像してみるのだが、収まりきっていない息子が暴れるだけで想像が機能不全に陥る。

(そうだよ。女になったらチンポないから性欲減退するんじゃないのか?)

ところが実際に弘樹は実に楽しそうに女の肉体で性欲旺盛なままだ。本人が呆れている位だ

から、ヤツがおかしいだけなんだろう。それとも性欲に支配されている男の心のままに、女の肉体……しかも薫子先生の成熟した身体に乗り移った所為なのだろうか。

(確かに俺も……転校生の……鈴木さんになれたとしたら……)

間違ひなくオナニーに明け暮れるであろう。授業が始まり遮る人々が居なくなつてから、横目で彼女の美しい姿を捉えて妄想すれば、股間が大暴走して大変な事になる。

(そういえば逆に先生の方はどうなんだろう)

すぐに暴走する男の性欲に振り回されていけないのだろうか？ 気になつて観察してみれば、やはり腰を浮かせて戸惑いの表情を浮かべているようだ。

(もう……男のアレつて本当に節操無く暴れるわねえ)

二日前にたつぷりと絞られたとはいえ若い男の肉体だ。溜まっているというのとは知識として解っているし、対処方法も存じている。けれども、それを実行するのは、男に染まつていく感じがして躊躇うのだ。

「よう……トイレに行かないか？」

そんな薫子の様子を見かねて、休み時間に勝が声を掛ける。戸惑う薫子に小声で「こつちで出してもスッキリしますよ」とアドバイスを送る。男二人で連れたつて小便に向かうというのは、中身を考えなければありふれた光景だ。しかし、いざ小便器を前にして薫子は躊躇つてしまふ。

「個室の方がいい……かな……」

「慣れておいた方が良くと思いますけど？」

立小便に馴れるというのは女のプライドが許さなかったが、この肉体になってから初めてという訳ではない。覚悟を決めて勝の隣に陣取るが、勃起したままのアレを前にしてやはり固まってしまう。

「大丈夫ですよ。折れたりしませんから」

「それは知ってるけど……」

眼を瞑って思考を閉ざし、薫子はトライをした。そうして放尿のコントロールが難しい事を学んだ。けれども、確かにスッキリとしたらナニも萎んでいく。

「ありがとう。楽になった」

洗面台で手を洗いながら薫子が声を掛ける。

「戻れるまでは頑張って下さい」

「弘樹君も貴方みたいに真面目に考えてくれればいいのに。ありがとう、これからもアドバイスをよろしくね！」

面と向かって言われると、相手は弘樹の姿をしているのに、何だか照れくさくなってしまふ。勝が不思議な感覚に陥っていると、薫子の小声が続いた。

「そういえば君にも運命の相手がいるんだよね？」

「ええ……まあ……」

「貴方なら大丈夫だと思っけれど、面白半分に身体を交換して被害者を増やさないで頂戴ね」
「勿論ですよ！」

けれども勝の口約束は、すぐに空手形となってしまう。それは昼休みの終わり頃、例によって弘樹から届いたメールから始まった。

『件名…ビックチャンス到来！ 本文…お前の運命の相手と、例の計画を実行するチャンスがやってきたぞ！興味があったら返信しろよ！』

例の計画とは、身体が入れ替わる儀式についてであろうか。そりゃ勝も薫子にはああ答えたものの、全く興味が無い訳じゃないから『何だよ一体』と短い返答を送信する。すると即座に返信があった。

『本文…お？食いついてきたな！詳細は放課後に話すぜ！但し保健室は監視されているから、午後6時に駅前で落ち合おうぜ！』

これからは変な事をさせないように見張ると、薫子が意気込んでいたのを思い出す。それにあの約束も思い出して、勝の良心がチクリと痛んだ。だけでも話を聞かだけだし、中身としては友人同士の単なる交流だ。そんな風に内心で言い訳をしながら、教室に戻ってきた薫子と挨拶を交わした。

放課後は適当に部活をして時間を潰し、夕暮れに沈む駅前で更に時間を浪費する。携帯で連

絡を取り合いながら合流するが、現れた弘樹を見て改めてドキリとする。メールだけのやりとりでは感じなかったが、姿は薫子なので大人の女性の色香が濃く漂っている。解りきっていた筈なのに、宵闇と街の明かりが違った雰囲気醸し出しているのだ。

「おまたせ！ んじゃ、ハンバーガー屋で話をすつか？」

「あ……はい。いや、待てよ！ あそこは部活帰りの連中が結構タム口してるぜ」

「すつか……ならレストランにでも入ってみるか？ 奢るぜ！」

「おいおい。先生の金を勝手に……」

「その辺はちゃんと話をつけたから大丈夫だぜ！」

ハイヒールを軽快に鳴らして歩く弘樹の後を追いかける。肉体は薫子だからタイトスカートに包まれた尻が誘うように左右に揺れて、勝は自然と分泌される唾を呑み込んでいた。

駅前の商業施設へと入り、何ちゃらグリルという名前の落ち着いた感じの洋食屋に入店する。向かい合わせに座ると何だかデートでもしている気分になってくる。勝が緊張している様子、弘樹はメニューの陰からニヤニヤと観察する。

「何を緊張してんだよ！」

注文が終わって弘樹はからかい気味に言葉を発する。

「いや……だつて……それより、お前あんまり先生を困らせるなよな！」

「俺だつていきなり先生の身体になって困ってるんだぜ！ 一気に年を取ったしさあ……身

体が疼いてしょうがないんだしい〜」

ボタンが外れて強調された胸を片手で揺さぶり、眼鏡の奥の瞳をウインクさせる。見え透いた挑発でも効果は抜群だが、勝は目を逸らして「そういうのがイメージ悪くさせてるんだろ……」と嗜める。

「こうやって男をからかうの結構楽しいぜ！ 女の特権だな。お前もなってみれば解るさ！」
その言葉で思い出して勝は本題の方を切り出した。

「で……計画が何だったって？」

「そうそう。今度、転校生のサブリナちゃんをさあ……身体計測する事になった訳よ！」

「ふう〜ん……ってお前がか！？」

「そうだよ！ 保健医のお仕事ですもの♪ まあ、それは役得として、その際に問診票とか事前に記入して貰うからさあ……いとも簡単に直筆サインをゲットできるわけよ！」

「成る程ね。俺の直筆をドサクサに紛れて忍び込ませようって事か？」

「そうそう！ 身体計測は四日後だから、その時までには決心してくれよ！」

そこで湯気の立ち上るプレートが運ばれてきた。

「さあ！ まずは飯を喰って精力つけようとしようぜ！」

意味深な言葉で会話が途切れたが、勝はすぐにその意味を知る事になる。食事終了後に再び誘惑が始まったのである。今度の手段はこんな感じだ。

「なあ……もし彼女の身体を奪う気があるんだったらさ……」

「そういう言い方は良くないよ……特別な関係になる……ただだ。お前と違って大切にしたいし」

「お前もなってみれば、すぐに俺の気持ち解ると思うけど……まあいい、それより女になる前に男を捨てておかないか？俺もこうなる前に童貞捨てられなかったのが最大の後悔だしさ……気持ち良くさせてやるぜ！」

言葉と同時に弘樹は靴を脱いだ細い足先を伸ばして、勝のズボンの上へと着地させる。そして、爪先を巧みに動かして竿の部分の擦り始めた。

「!? ん……おい！」

小声の抗議を聞かぬ振りをして、細めた瞳とチロリと出した舌で更に誘惑する。足先はどんどん伸びていて、足裏全体で竿を摩り指先は亀頭の上で踊っている。足コキと呼ばれる淫靡な技法は、フィクションの世界でしかお目にかかった事はなく、加えてこんな公衆の面前という状況が、勝の脳内に快感粒子を爆発させた。

「やめろって……マズイだろ？ おい……どうすれば止めるんだよ」

涙目の抗議をニヤリと笑って弘樹は答えた。

「先生とシたいです……って言いなさい」

昨日と全く同じ手口だが効果は靦面で、躊躇いながらも勝も屈してしまう。かくして、弘樹

は二日連続の童貞狩りに心を躍らせ、勝は約束を守れなかった事に心を沈ませる結果となった。

薫子のマンションへの道筋も、部屋に到着してからの経緯も昨日と大体同じようなものであった。向かい合った裸の男女だが、やはり男の方がぎこちなく目線も逸らしがちだ。

「ここまで来て今更、怖気づいたのかよ！ 遊びだと思つて割り切っちゃおうぜ！」

「いや……そう考えると……お前と……こういう関係になる訳だから……萎えるな……」

「んふ！ それじゃあ先生の特別講習つて事でどう？」

「いや、それだと今度は本人との約束が……」

「ああもう！ 意外と難儀なヤツだな。もつと楽しもうぜ！」

弘樹は問答無用で乳房を揺らして、勝に襲いかかった。

「ほら！ でっけえチンポ良く見せろつて！」

「お前なあ……」

呆れながらも勝はガードする手を緩めて身を任せる。細い指先が遠慮なく襲い掛かって、エラを剥き出しにした凶悪な先端へ触れていく。

「うわあー！ すげえーなあ！ こんなパンパンに張り出して、ぶつとくつて！ 勃起したら大変なんじゃねえの？」

「自分じゃよく解らねえよ……」

「オナニーは最高何回？」

話しかけながらも、指先では極太を擦っていく。

「んー。十回くらい又いた事あるかな……」

「やべえよ！ それ最強オナニー中毒だよ！ でも、こんな凶悪なのがサブリーナちゃんっていうクォーターハーフの美少女の持ち物になる訳かあ。同情しちゃうなあ」

「まだ決めてねえよ……」

「まあ、いいや！ ほれ！ こっちも弄ってみたいだろ？」

弘樹は身を乗り出して乳房を突き出すようにする。想像以上の柔らかさに驚いていると、「揉んでもいいんだぜ」という言葉が降り注いできた。言葉に従い両手で触れてみれば一瞬で虜になる心地良さで、気がつけば勝は大きな掌に力を入れて思いつき捏ね回していた。

「いやあーん。勝君ったら激しいのね」

茶化す声も気にならない位に夢中で揉みしだき、コリコリとした先端部分も夢中で弄り回す。

「吸ってもいいわよ！」

命令に従うロボのように、勝は口を開いて乳首に吸い付く。荒くザラザラとした舌先が這い回り、弘樹の中で多大な快感粒子が荒れ狂い喘ぎ声上がる。心地良い声を耳朶で受けながら

勝は作業に没頭していく。押し寄せる余りの気持ち良さに、弘樹は力が抜けてぐったりと倒れ込めば、それを追いかけるようにして勝の身体が覆いかぶさってくる。完全に組み敷かれた形のまま弘樹が身を振れば、それだけで密着状態の柔らかな肉体は心地良い刺激となり、男性器までもが擦られてビクンビクンと喜びの脈動をする。

（うおおお、もう我慢の限界だ！先生ごめんなさい！）

起き上がり血走った眼で獲物を捉えて、欲望のままに突入口を弄っていく。初めて見る生の女陰に感動が押し寄せてくるが、それよりも突撃させると相棒が訴えかけてくる。けれども童貞の悲しさから、勝手が解らずに困惑する。敏感な粘膜に当たる鼻息を感じて、ようやく快感の細波を漂っていた弘樹の精神が復帰する。そして股を凝視する男の視線にすぐに気付いた。

「ほら……ここだよ……ここお〜」

絶え絶えな艶色ボイスと共に、指で陰唇をくっぱりと広げる。現れたシークレットガーデンに好奇の視線が押し寄せて、弘樹の背筋にゾクゾクした快感を走らせた。

「ここが膣口だぞお〜、その上の穴が尿道。クリも解るだろ？」

「すげー。本当にクリトリスも勃起するんだ……」

「ちよつと触ってくれよ」

勝が実行すると、即座に甘い吐息が返ってくる。

「こんなに小さいのに、チンポよりも断然気持ちいいんだぜ！」

拙い指使いにも、身を振じらせて感じ入る弘樹の様は本当に気持ち良さそうで、勝の中に羨ましさ募っていく。けれども今はまだ男だから、早く突っ込みたくて仕方がない。

「待って待って！ まずはゴムをつけろうよ！」

手伝って貰い装着して、再び互いに向かい合う。

（やべえな……改めて見るとバイブより太いんじゃないか？ 入れるのちょっと怖いなあ……）

心の中ではそう思いながらも、弘樹は経験豊富な女性を装って、再び陰唇を大きく開いて「穴は解つただろ？ 一気に貫いてみせろよ！」と挑発する。

鼻息も荒いままに勝は本能に身を任せて、棍棒を振り回すように先端を押し当てる。グニュグニュと、柔らかな壁を突き進んでいく初めての感覚が堪らない。

「はぐううう」

狭い膣内一杯に極太が荒々しく押し寄せて、昨日の結合とは比べ物にならない衝撃に弘樹の口から苦悶の声上がる。呻き声を声援と捉えたかのように、勝は締め付けと絡みつきを味わうように一気に奥まで突き進む。コツンと子宮に口付けをして、これ以上の進軍は無理だと悟ると、水泳のターンのように折り返し復路の膣壁を楽しむ。

「はあふう。はあふう」

勝手の解らないままに一心不乱になって腰を動かしていく。勝の乱暴な攻めに痛みを感じな

がらも、弘樹は蹂躪されるのが段々と快感に変わっていくのを感じていた。パンパンと玉袋が激しくぶつかり、荒い息と甘い吐息だけが室内を満たす。

快感を貪り合う二人の友人にも、やがて終わりが訪れた。繋がったままにゴムの中へと勝が情欲の全てをプチ撒ける。続いて押し寄せる疲労にぐったりとしながら、放出の満足に浸り柔らかな大地へと着地する。

汗にまみれた男の重くゴツゴツした身体に押しつぶされながら、弘樹も幸せなまでの余韻に浸っている。こちらは結局最後まではイけなかったのだが、過程にも満足であったし、今こうして繋がっているのにも不思議な充足感が溢れているのだ。

「よう！ 童貞卒業おめでとさん！」

一休憩の後にかけられる改まつての一言に、勝は照れくさくて五分刈り頭を掻き筆る。

「けど、まだまだ出せるだろ？ もう一回戦しようぜ！ 繋がったままで俺……いや私の身体を抱きかかえてみてよ！」

指示通りに実施すれば、重力の働きの深い結合が生まれる。木にしがみ付くコアラのような体勢の密着は、柔らかな乳房が厚い胸板で押し潰されて互いの快感に拍車をかける。ベッドの下から腰を突き上げて、勝は攻撃を開始する。激しい振動が加わり乳房も擦れて、弘樹の快感も何倍にも増していく。

始まった二回戦は一度目よりも早い終焉となったが、互いに満足の行く結果となった。けれ

ども夜はまだまだ長い。たつぷりと放出したゴムを換装して、続けて三回戦へと突入する。今度はベッドに女がうつ伏せとなり、尻を突き出して背後よりの挿入だ。新たな結合は新たな快感を生み出して、男女を魅了した。

「はあはあはあ……まだいけるよな？」

乱れた吐息で瞳を爛々と輝かせて弘樹が催促する。流石に勝も少々呆れ顔で答えた。

「ああ……まだ大丈夫だ……けど、女ってそんなにいいのかわ？」

「身体を動かすのは主に男の仕事だろ？ 女も動いているけど、どっちかというと快感を受け止める方だから楽なんだよね！ それに、内側からの刺激とかクりに伝わる振動とか、更に擦れる乳首だつて気持ちイイし、マジで何倍もの快感が押し寄せるんだぜ！ それから出して終わりの男と違つて余韻もスゲーしな！」

艶々とした笑顔で紡がれる弘樹の言葉は、最中のよがり方から見ても説得力があつて、勝はゴクリと唾を呑み込む。

「まあ、お前が彼女になつたら、たつぷりと教えてやるぜ！ けど、そうなつたら女同士だな！

レズだぜ！ レズプレー！ 興味あるよな？」

そう聞かれたならば、勝には頷くしか選択肢はない。

「だろ？ もし、お前が彼女の身体を頂くならば、今日がチンポの使い始めにして使い終わりかもしれないぞ！ だったら存分に使つておくしかないよな？」

再び肯定するしかない。

「んじゃ、引き続き先生と熱い夜を過ごそうね！」

弘樹は自らの豊満な乳房を摺り寄せながら、手を伸ばして男のモノに奉仕し開戦準備をするのであった。

続きは製品版でお楽しみ下さい☆